へることなど相談をした後、

「それから、村落内に怪しい支那人が一名潜入してゐるらしいといふ報告を受けました。只今、巡察を二組派遣しておきましたが……」

「人間がゐるところは大丈夫だよ。それより、飛行機の方だな。まあ、よろしく頼みます」

あとで、私は、部落民の日本軍に對する感情はどうかと訊ねた。

「うん、場所によるね。大體穏かだが、なかには油斷のならん奴がゐるよ」

「ある砲兵隊が舍營してゐる部落で、敗殘兵だか匪賊だかの襲撃を受けたところがあるつてね。なんでも部落民のいくたりかゞ焚火をして合圖をしたんだつていふぢやないか」

私は何處かで聞いた話を、逆に持ち出してみた。

「ふむ」

とSは別に氣にもとめないらしい。

プロペラの唸りが、あちこちで聞える。機械の點檢をしてゐるのであらう。ずらりと並んだ〇〇機の、やゝ仰向き加減に翼を張つて、隊長の天幕をぢつと睨み、命令一下を待つてゐるやうな姿勢が、息づまるほどの物々しさである。これ以上邪魔をすまいと思つたが、さて、行先はと考へる。北京へ直行するにしても、汽車では四五日を見ておかねばならぬ。若しや便宜を計つてもらへたらと、私は、Sにかう云つた。

「これから北京へ行かうと思ふんだが、飛行機の序はないかね？」

「序？さあ、おれんとこにはないが、待てよ……天津までぢやいかんか？」

「いかんことはない。それでもいゝ」
「〇〇司令部の連絡機に席が空いてないか、訊いてみてやらう」
丁度、S自身、〇〇部へ出掛ける序があるとみえ、私も彼の車に同乘することができた。

支那風呂

南方邯鄲に通ずる道路は、交通のはげしいためか、ひどく傷んでゐる。日中はまだ相當に暑い。强行軍の徒步部隊が、砂塵のなかをぐんぐん押して行く姿が目につく。胸の釦を外し、手拭を口にくはへ、戰帽の後ろに汗がにじんでゐる。根かぎり步くのだといふ決意が、一人一人の顏色にうかがはれる。隊長は默々と軍刀をつき、時々、隊列の亂れを氣にしてゐる。ひと足おくれかけた兵士は、背囊を兩臂で支へ、前のめりに追ひ附かうと

あせる。飯盒が音を立てるのは中身の乏しい證據である。今夜は、何處で泊るのか。そこには何が待つてゐるか。せめて喉をうるほすに足る清水でも湧いてゐてくれ。

「おい、こら、みろ。徒歩部隊は、かういふ時は辛いぞ。お前らは、まるで大盡だ」

Sは、運轉手臺の兵士らに聲をかけた。

○○に着く。

Sについて上つて行くと、彼は、

「ちよつと待つてくれ」

と云つたまゝ、一室の中へ姿を消した。私は、戸口で、ぼんやり待つてゐた。この部屋のなかでは、重要な作戰が籌らされてゐるのだなと思ひな

がら、私は、廊下を往つたり來たりし、煙草を一本喫ひ、ノートを取出して、ふと浮んだことを記し、などしてゐると不意に後ろで靴の音がした。

○○の一將校が、銃に着劍をした○○兵を從へて、のつそり歩いて來た。私は、手摺を背にして道をあけると、その將校は、私の前に立ち止つて、じろじろ私の顔を見、「お前は何者だ」と云はんばかりの表情で私の返答を待つ身構へをした。

そこで、私は、先づ、自分の風體といまゐる場所を考へ、なるほど不審に思はれてもしかたがないと氣づき、

「S部隊長を待つてゐるところです」

と、甚だ要領を得ぬ辯解をした。

それでも、將校は、解せぬといふ顔つきで、今度は、私のからだを檢め

るやうに、見あげ見おろしするので、
「從軍記者です」
と、怪しいものでないことを信じて貰はうとすると、いきなり、彼は、
「どなたです、お名前は？」
もう安心と思つたから、
「文藝春秋社特派員で、岸田と云ひます。名刺を生憎、すつかりなくしまして……」
「あゝ、やつぱりさうですか。自分は、Cであります」
急に姿勢を正して、擧手の禮である。
Cといふ名前は、咄嗟に、ひとりの少年の顏を私の眼の前に浮びあがらせた。その少年は、眉目秀麗な、幼年校の服の似合ふ、和歌山辯の、忙が

しく瞬きをする癖のある少年である。
さう云へば、この將校の、日にやけた、頰のそげた、髭の濃い顏のどこかに、その少年の面影が殘つてゐるのである。
同縣の後輩といふわけで、この學校の習はしに從つて、私はよく彼を連れて陸軍墓地などを散歩したものである。
「やあ、これはお見それしました。で、君は今、こゝの○○に？」
「いえ、○○部隊の○○をいたしてをります。○○○○に參りました。あなたはまた、ご苦勞なお役目で……」
「どうしまして、のんびりと方々を歩いてゐるだけです」
なにから話をしていゝかわからぬ。
「では、いづれまた……」

彼は、大切な任務を果さねばならぬ。
「ご機嫌よう」
私も、慌たゞしく帽子に手をかけた。
大分待たせた揚句、Sは、
「やあ、失敬失敬……」
と云ひながら出て來た。
そこから、今度は、○○の○○へ車を走らせた。
工業學校の校舍がそれにあてられてゐた。航空兵科の若い○○に私は紹介され、明日ならば天津までの便乘差支なしといふことになり、航空地圖を壁一面に貼りまはしたその部屋のなかで、私はちよつと、うますぎはせぬかと心配した。

み嫌ふところは、かの「文化的と稱する柔弱さ」にあるのである。
その一例として、幼年學校の教育綱領とでも云ふべきものゝ中に、作文教授の方針を規定して、「小說的なるべからず」といふ一項目が掲げられてゐたことを記憶する。
この「小說的」なる言葉の意味は所謂「軟文學」の概念から割出されたものに相違なく、勿論文體については言文一致を禁じ、心理描寫や自己分析めいた記述を排し、現實暴露的な物の見方を許さぬといふことは事實であつた。
昔と今とは幾分違ふであらうとは思ふけれど、早く云へば「近代文學」の一面が日本軍人の氣質と相容れないものであると同時に、「文化」なるものゝ如何なる意味に於けるデカダンスも、眞の武弁には鼻もちのならぬ現

象なのだ。從つて、さういふデカダンな傾向をはらむ一切の人間的欲求に同情をもたぬ決意が、當然、今日の重々しい非常時局を形づくつてゐる原因と見て差支ない。

社會心理としてのひとつの重要な問題がこゝにある。そして、日本の知識階級は、たしかに「文弱」に流れてゐるといふことを遺憾ながら私は認め、自動車が飛行場へ着くと、私には一瞥もくれず立ち去つた例の將校の後姿を、しばらく苦笑を以て見送つた。

燒芋

飛び出す○○機、舞ひ降りる○○機、場内の空氣はどよめき立つてゐる。一瞬、捲き起つた砂煙が徐々にはれると、隅々に張りめぐらされた天幕の内外に、慌ただしい地上勤務兵の活動が見え、着陸點を示す紅白の吹き流しが靜かに朝風に飜つて、○○大集團の基地らしい威容を感じさせる。

○○機は何處から出るのか、それを確めるために、私は一つの天幕に近づいた。

將校が五六人、その入口に佇んで空を見あげてゐる。いま離陸したばかりの一編隊がもう山の彼方に消え去らうとしてゐた。その時、私は、彼等のうちの一人に問ひかけた。

「天津行きの〇〇機に乘りたいんですが……」

「あ、新聞の方ですね。まあ、こちらへ……」

まだ時間があると思つたので、私は指されたアンペラの小屋のなかへはひつて行つた。見ると、眞ん中に、土を掘つて炭火をおこし、その前へ椅子を引寄せてどつかと腰をおろしてゐる一將校が、穏かな微笑をもつて私を迎へ、

「新聞はどちらですか?」

「いや、新聞ではありません。文藝春秋といふ雜誌です。生憎、名刺をす

つかりなくしてしまひまして……」

「あゝ、文藝春秋……。それはそれは……。記事になることがありますか?」

といふ風になかなか如才のない應接ぶりである。私は、これがG氏であるといふことはすぐわかつた。

別に一問一答をしようとは思はず、私は、たゞ、戰場に於ける一高級武官の身邊について觀察することの興味で滿足した。

しかし、G氏は、極めて熱心に私に話しかける。特に支那の軍隊について、その歷史的特性から說き起した一種の論斷には傾聽すべきものがあつた。近代戰に於けるその訓練の程度といふ問題になると、氏は、いきなり私にかう問ひかけた。

「支那兵の構築した陣地といふものを見られましたか？」
「野戰の陣地は見ました。相當大がかりなもんですね」
「大がかりだ。その上、勞力を惜しげもなく使つてある」
「まつたく、私も、作業の丹念なのに驚きました。ちよつとした散兵壕でも立派な細工といふ感じですね」
「さうでせう。あれを日本軍なら、さう易々と棄てはしませんよ。支那軍は、あんなに丁寧に作つた陣地を、どうしてあゝ簡單に投げ出すかといふと、それには、わけがある。强い弱いといふ問題以外に、陣地といふものに對する考へ方、觀念が違ふんです。いゝですか、どうせ一日か二日で退却するんなら、彈丸さへ防げればよささうなもんだ。なにも、あゝ馬鹿丁寧に、定規をあてたやうに作らなくつてもよささうに思はれる。ところ

が、支那人は、それ、土といふものに對して、日本人の想像もつかないやうな親しみをもつてゐる。土をいぢるといふことが、ちつとも苦にならないのみならず、それは一種の日常茶飯事です。ごらんなさい、日本の子供は、たとへ百姓の子でも、轉んで着物へ土がついたら、起き上つてすぐにそれを拂ふでせう。これや習慣でさうなつてゐる。然るに、支那の子供はどうです。轉んでも決して土なんか拂はうとしない。土のなかで生活してゐるやうなもんだ。泥まみれになることは、汚いことぢやないんです。土工作業でも、日本人なら足で踏みかためるところを、支那人は、平氣で手を使ふ。綺麗に仕あがるわけです」
「鐵砲を打つより、その方が面白いんでせう」
「まあ、さういふわけだ。それに、第一、支那軍はちよつとした陣地を作

るのにも、そのへんの農民や苦力を大勢使ひます。たゞで使ふ。兵隊は監督するだけだ。これなら、暇をかけて、いくらでも念入りにやれるでせうよ」

朝の空氣はそれでも冷いとみえて、時々、年輩の將校が火にあたりに來る。

飛行服の一將校が突然はひつて來て、一方の壁に貼りつけてある地圖に向ひ、何やら説明をしはじめた。

それが出て行くと、G氏は、私を地圖の前へ招き、今はひつたばかりの情報を聞かせてくれた。

私は、○○機のことが氣になるので、そのことをちよつと斷つてこの小屋を出た。

やつと尋ねあてると、飛行機は出るばかりになつてゐるが、天津からの氣象通報で、向うは霧が深いことがわかつたので、しばらく出發を見合せてゐるといふ話であつた。

松竹映畫班の一行がやつて來た。飛行機へ爆彈を積むところを寫すのださうである。私も、それは見ておきたい。

○○部隊の○○機數臺が、○○キロの爆彈を翼下に抱へ込む操作が開始される。

瞬きをせずに見てゐるのは辛い。

○○部隊長は、腕時計を見てゐたが、そこへ出動命令が下つたらしい。

操縱士一同は部隊長の天幕へ集合した。

「○○部隊はこれより○○方面に出動し、地上○○部隊の攻擊に協力し

つゝ、なし得れば……」

若い部隊長の聲は、凛然としてゐた。

「自分は××中尉機に同乘する。終りッ」

操縱士の間で、細かい合圖の方法などが打ち合はされた。

油斷をしてゐると、○○機がいつ飛び出すかわからないので、絶えずその方向へ眼をくばつてゐなければならぬ。藍色のいくぶん華車な胴體が、遠くからでも見分けられるのである。

○○部隊は、一機一機、同じ間隔をおいて順々に、離陸した。それがやがて、規則正しい編隊となつて、南西へ、南西へ。機上の人々の姿がいつまでも私の眼に殘つてゐた。

さあ、こゝでどれだけ時間を過したらいゝのか？　出發が明日に延びる

やうなことになるまいか？

もう晝も近く、腹は遠慮なく空いて來る。

私はしかたがなく、催促顏を見せに行つた。操縱士は、飯盒の辨當を食つてゐるところである。

「どうも痛くていかん。齒だか耳だかわからないんだ。とにかく、間をおいて、キリキリキリキリッと來るんだ」

そばの機關士に話しかけてゐる。見ると、どうやら熱のありさうな顏色である。

今朝から二度も○○まで往復したといへば、相當に疲れてはゐるであらう。この人がまた天津まで私を乘せて行つてくれるのかと思ふと、濟まぬやうな、危いやうな氣がして、

「僕、アスピリンを持つてますが、飲んでみますか？」
「いや、熱はないですよ」
アスピリンは鎮痛劑であることを知らないのであらうか。私は無理に勸めてはみなかつたが、空中で痛みが堪へられなくなつた時、飛行機はどうなるのであらうかと、ひそかに氣を揉んだ。
出發の時は知らせてくれと、機關士に云ひおいて、私は、またぶらぶらそのへんを歩き廻つた。
さつきのG氏の小屋に近づいた時、私は何氣なく、その中をのぞいてみた。
「まあ、はいり給へ」
「天氣がよくつて何よりですな」

私は、この眠くなるやうな支那の秋日和をなんと讃美していゝかわからなかつた。
「あゝ、いゝ天氣だ。どうです、これは……。戰地にゐると子供みたいなもんだ」
G氏が棒切れで灰のなかを掻きまはしてゐる、その棒の先へ轉がり出たのは、うまさうに燒けてゐる二つ三つの薩摩芋であつた。

空中の論理

〇〇機は午後二時になつて、やつと出發した。

高度の加減か、光線の具合か、來がけに見た時よりも下界は一層單調な物の象を示すにすぎず、私は早くも退屈しはじめた。

そこで私は、ぼんやり「勇氣」といふことについて考へてみた。

誰が云つたのか忘れたが、支那兵のなかにもなかなか強いのがゐて、勇敢に立ち向つて來るが、それはたゞ、向つて來るといふだけで、こつちに

とつてはあんまり怖ろしくない。なぜなら、それ以上のことはできないからで、いよいよとなると、たゞ首を差しのべるだけだ、といふのである。

これがどこまでほんとだか私にはわからない。しかし、今度の戰爭でも、さういふ支那式の勇氣が發揮されてゐるやうに思ふ。

日本人の眼から見れば、この種の勇氣は、まことにつまらぬものゝやうにとれるかも知れず、進む以上は一敵でも多くを屠ることこそ眞の勇氣であると考へられるであらう。

ところが、この違ひは、たしかに國民性によるものであるのみならず、軍隊としての士氣、卽ち、訓練と自信の相違にあること明かであつて、恐らく彼我立場をかへたならば、どういふ形で表れるか、これはちよつと判斷がしにくいのである。

およそ今日、わが軍將士の眼覺ましい働きについては、これをかれこれ論ずるものもないくらゐであるが、その働きのよつて生ずる精神的な力、特に「勇氣」の形に現れたところをとらへて、その質を吟味するといふことを、誰かが試みてはくれないであらうか？

私は、また嘗てある武官からかういふ話を聞いたことがある。歐洲戰爭の時、各國の軍隊は、それぞれよく戰ひ、長期に亙る對陣中にも、われわれが眼をみはるやうな勇猛ぶりを發揮した。しかし、彼等が日本の兵隊と違ふところは、飽くまでも自分の「生命」を大切にすることである。生きられるだけ生きようとする努力が、常に彼等の行動を支配してゐる。死んでもかまはぬと覺悟する前に、なんとかして生きられぬかといふ工夫を忘れない。

S部隊長と別れて、私は、自分の宿舍（？）に戻つた。

もう日が暮れてゐた。

靖鄕隊の面々は中庭へ大鍋をもち出して牛肉をつゝいてゐる。炭火が赤赤と燃え、いくつかの眼が闇の中で光つてゐるのが、なんとなく殺伐な、それでゐてお伽噺めいたものを感じさせた。

その晩、坂本氏から支那風呂にはいらないかと勸められ、さういふものがあるのかと訊くと、街の風呂屋が今日から開業したからとのことである。なにしろ、もう四晩も汗になつたからだを洗はないのだから、たとへ、何風呂であらうと結構である。

食事をすますと、坂本氏は先にたつて私を街に連れ出した。いくつかの横町を曲り、珍しく二階建ての映畫館のやうな建物の狹い階段を登りきる

と、むつと鼻をつく臭ひは、内地の錢湯のそれとあまり變らない。

さう思つて部屋の中を覗くと、共同風呂には、丸裸の日本男兒が殺到してゐるのである。

坂本氏は見張りをしてゐる男に何やら交渉してゐる樣子であつたが、やがて、われわれは貸切りの一室をあてがはれた。

そこは休憩室と浴場とに分れてゐて、二人分の設備がしてある。休憩室には寢臺が二つ並べてあり、暇と相手があれば一日ぢゆうごろごろしてゐられる仕組になつてゐる。給仕が茶を運んで來る。

浴場の方は、殆ど西洋風呂と同じ形をした浴槽が二つあつて、別に風變りなところもないが、いよ〳〵三助君が「流し」を取りに來る段になると、私はまつたく面喰つた。

先づ浴槽の緣へ細長い板を渡し、それへタオルを敷いて、私を仰向けに寢かせるのである。文字通り俎上の魚である。三助君は典型的支那人の相貌を備へた、六尺豐かの大男だが、これが日本のやうに裸ではなく、たゞ兩袖をまくりあげたのみで、どこをどうしようといふのか。彼は無造作に、その掌で私の胸もとをきゆつきゆつと撫ではじめた。なるほど、瞬間にして垢がよれるので、私はをかしくなつた。胸から腹、股から臑へとこすりおろして行く。片脚を高く持ちあげて、尻のあたりに及ぶと、皮がひりひり痛む。しかし、到るところ、面白いくらゐくるくるとはがれおちるものが感じられる。ますます笑ひたくなるのを、こゝで笑つたら三助君がなんと思ふか、恐らく支那人にその意味は通じないであらうと氣がつき、坂本氏をふり返つて、

「なかなか出ますよ」
と報告してごまかした。
表がすむと、今度は裏返しにされた。
脇の下から足の裏まで容赦なくやる。人間はくすぐつたいものだといふことを、彼等は知らぬと見える。恐らく、支那人の殘虐さとはこんなところにあるのかも知れぬ。
しかし、この徹底的な「流し」のおかげで私は一生の垢を洗ひ落したやうな氣分になり、日支三助比較論の意義を考へながら、一つ時、休憩室の寢臺の上に寢そべつた。

「文弱」について

堀内氏の部屋で寢る用意をしながら、明日私は天津へ引つ返すといふ話をもちだすと、氏は幾分殘念さうに、
「もう少し前へ出てごらんなさい」
と云つた。
「いつでも飛行機へ乘せてもらへるなら、さうしてもいゝんですが、この機會を逃すとどうなるかわからないから……」

「なあに、大丈夫ですよ」
「また出直して來ることにしませう」
そんなことこそ出來るかどうかわからない。しかし、私の言葉に嘘はなかつた。實際、戰爭の一番見ごたへのある部〻と見ずに歸るのはなんとしても心殘りである。
堀内氏は、こんな序でもなければと云つて、内地にゐる奥さんへの手紙を私に託すべく書きはじめた。
その時、部屋の入口をのぞき込むやうにして、一人の支那人がはひつて來た。
片腕を三角巾でつるし、傷が痛むのか、泣きだしさうに顔をゆがめてゐる。

堀内氏は、その訴へるやうな言葉を聽いてゐたが、やがて、私の方に向ひ、
「この男はわしの部下ですが、負傷して此處の野戰病院にはひつてゐるんです。ところがたつた一人の支那人で、言葉も通じないし、心細いから北京へ返してくれと云ふんです」
「北京に實家でもあるんですか？」
「あることはあるんですが、北京へ歸すにしても、やはり軍の病院へ入れてやりますよ」
その支那人がまた喋り出した。堀内氏は、今度は諭すやうに長々とそれに應へた。支那人はすごすご引きさがつた。
「病院なんかへはひるより、自分で藥を買つてなほすと云ひ出すんです。

銃砲の傷にはとてもよく利く藥を北京で賣つてゐるからつて承知しないんですよ」

傍らから坂本氏が口を挾んだ。

「奴さんたちは一度負傷なんかすると、から意氣地がなくなるんでね。もう駄目ですよ、あれぢや」

私は、横になつた。

「あなたも日本へなにかお言傳はありませんか？」

坂本氏はそれに答へて、

「わたしは、もう支那人みたいなもんですから……。名前も支那風に劉榮正と云つてるくらゐです。鄕里の方とはほとんど緣を切つたやうな形でしてね」

「ぢや、家族の方は北京にでもをられるんですか？」

「えゝ、わたしの姉が○○○の家内になつてましてね、ご承知でせう、○○省の主席をしてゐた、いま行衞不明ですが、むろん、日本軍と戰つてゐるでせう。それも止むを得ずです。わたしも、今度の事變がなかつたら、その○○○の妹を貰ふことになつてゐたんですが、さうすれや、これで○○省祕書ぐらゐの地位につけたんです。さういふわけで、姉がいま北京にゐるもんですから……」

「○○○といふのはたしか日本の士官學校を出た人ですね」

「それがですよ、事變直後に、日本の新聞が姉のことを書きたてたもんだから、先生、南京に對して立場がわるくなつたらしくてね。それも、姉とわたしとで滿洲へ行つたことをなにか日本のためのやうに書いたのが致命

的だつたんです。困つたことをするもんですよ、新聞は……。親日家はみんな日本の新聞に親日家と書かれることをひどくおそれてゐるわけがわかるでせう」

手紙を書き終つた堀内氏は、

「ぢや、これをひとつ郵便で出して下さい。家内のゐどころがはつきりわかりませんから、宛名をかうしておきました。この家は日本でもわしの根城です」

私は、今迄見た限りは戰場のどういふ部分と云ひ得るかを考へた。戰線の後方と云つても、彈丸の音が聞えないくらゐのところでは、その言葉の感じとは隔りがあるやうに思はれた。

さつき○○を出るとき、ふと耳にはさんだその日の前線の情報にも、娘

子關に向つた鯉登部隊が、地形の關係であらうか、敵の包圍を受けてなかなかの激戰中だとのことである。鯉登は事變當初からニュース面に登場した私の同期生の一人なのである。さういふ緊迫した情況も、此處にゐては、想像が眼に浮ばず、內地で號外の文句を讀むのと大差はない。

堀內氏から、「あなたは流石に軍人であつただけ」などと云はれ、さうか知らと自分で不思議に思ふくらゐ、危險は常に遠くにあるやうな氣がしてゐたのを、いよいよ明日は後退だときまると、また一層ほつとしたやうな、それをまた自分に咎めるやうな、複雜きはまる氣持になつた。

これでみると、敵の砲火を浴びるといふことが、なるほど人間を得意にする理由がわかるやうに思ふ。

私はぐつすり眠つた。

翌朝、堀内氏の計ひで自動車が用意されてゐた。

志士諸君、あなたがたが日本を愛し、同時に支那の民衆を愛するといふ言葉を私は信じようと思ふ。事變でも終つて、諸君と再會の機を得たら、その日本について、また支那民衆について、お互に率直に語り合ひたいものである。

○○部隊○○から、○○飛行場へ送られる。同乘の一將校は、その軍服が血の臭ひのするほど殺氣立つてゐた。恐らく、第一線の物音を耳に殘し、これからまた、その物音のなかへ飛び込んで行くのであらう。相手の話しかけるまゝに、私が答へる聲は、およそわれながら調子の合はないものであつた。

この時、私は、ふと「文弱」といふ言葉を思ひだし、この言葉が今日軍

人の間でのみ使はれてゐるらしいのを面白いと思つた。

「文弱」とは正確にはどういふ意味であるか、語原的な穿鑿は私もしたことはない。

しかし、第一に、「軍人勅諭」に、軍人は文弱に流れてはいかぬと仰せられてある。

質素を旨とすべしといふ御諭示のなかにその言葉が使はれてあり、從つて、質實剛健の氣風と相反する傾向を指したものであらうと思はれるが、軍人仲間、殊に陸軍の將校生徒らは、少くとも私の嘗てさうであつた時代には、この言葉をやゝ特別な意味にも用ゐてゐたやうである。

卽ち、學課はよく出來るが、教練とか武術とかは不得意なものを往々にして「文弱の徒」と呼び、言語動作が活潑でなく、神經質であつたり、瞑想

的であつたり、身なりを氣にしたりするやうな輩にもこの言葉が當てはめられる。殊に、同じ學課でも、圖畫や作文を好み、外國語に熱中し、假に體操の時間を頭痛がすると稱してサボリ、許可されてゐない書物など讀み耽るものがあつたら、これこそ「文弱」の尤なるものであらう。

それからまた、女の話などする奴も、文弱の類ひに入れられる。抑も異性との戀愛なるものは、文弱から生れるものだといふ信念をもつてゐるのである。

彼等の思想、言論のはしばしに於ても、この「文弱」といふ尺度はしばしば適用される。第一に、平和主義、人道主義、自由主義、等々の流れを汲んだものはすべてこの範疇に入れるべきであらう。

さて、私が思ふに、これを一般的に論じつめれば、武斷的なる精神の忌

それがいくぶん死を怖れるといふ表情を呈することもあるにはあるが、それでも危險を冒しもし、その危險のなかで最も安全な道を選ぶ判斷を狂はせないことにもなる。

そこへ行くと、日本人は、死ぬことが卽ち目的であるかの如き放れ業を演ずる。生命を投げ出すことが、卽ち義務であり、名譽であるといふ信仰に燃えてゐる。その結果が、奇蹟的な勝利を導きさへするのである。生命への執着は、明かに卑怯と見える場所があることをわれわれは敎へられてゐるのだ。指揮官が部下に「死ね」と命ずる、その象徵的な意味を、西洋人は理解し難いだらう。自分の最後を壯烈なものとしようとする祈願は、日本軍の所謂「神速な行動」の基礎である。

なるほどと、私は思つた。

が、こゝでちよつと面白いと思ふのは、日本人の勇氣は、支那人のそれとも、西洋人のそれとも違ふのは確かだとして、さて、東洋と西洋とを比べてみた時、日本人と支那人とに共通なある一點が發見されはせぬかといふことである。この比較は、支那軍を敵として無理に高く評價することにはならぬと思ふ。

「生命」または「死」といふものに對する、東洋的なある種の觀念が、たまたま、二つの民族の間で、別個のニュアンスをもつて、その戰ひぶりを彩つてゐるといふだけの話である。

私は別にこゝから教訓を引出さうとは思はぬ。戰ひは現に、この兩民族の手で戰はれ、歐米人は、その光景に戰慄しつゝある。

われわれは、どちらかと云へば、殺戮の悲劇に眼を蔽ふことを恥ぢ、「生

鐵上より見おろした浸水地帶

きんとするもの」の叫びをたまたま滑稽に感じる風習に慣らされてゐること
とを告白せねばなるまい。
私はまだ飛行機の上にゐるのである。外をみると、何時のまにか、もう
例の大浸水地帯の上にさしかゝつてゐる。雲がきれぎれに浮んでゐる上へ、
翼の影をおとしながら、高度八百の水平飛行である。
空の一角に地上の部落が映つてゐるのかと思ふと、それはやはり、水面
に浮ぶ村々の眠つてゐるやうな姿であつた。それほど、眼界は廣漠として
高いのである。
たちまち、綿雲が地上を包んだ。その代り空は綠色に輝きだした。私は
眼をつぶつて、再び瞑想に耽るより外はない。
が、それからの、とぎれとぎれの夢は、まつたく事變とは關係のないも

のであつた。

天津——北京

天津の街では圓タクを拾ふといふことが不可能である。平生はどうか知らぬが、只今は流し自動車など一臺も見當らぬ。

私の拾つた人力車は、勿論、私の言ふことは通じないらしい。

「タラチ・ハウス・ホテル」

なんども繰返したが、駄目である。

「英租界」

と、いくぶん、支那語風に發音して聞かせたけれど、車夫は困惑の態に陷るばかりだ。

「タラチ・フアンテン」

と云ひ直した。飯店とはホテルのことである。

交通整理のお巡りさんがやつて來た。

これならわかると思つて、再び、タラチ・ハウス・ホテルを繰り返した。

彼はうなづいて、車夫に何やら說明したらしい。

車夫は、「なあんだ」といふ顏をして走りだした。

が、どうも方角が違ふやうである。佛租界を通り拔けねばならぬ筈だのに、日本租界からいきなり、反對の方角へ曲つて行く。

足を踏みならして、

「英租界」

と、私は念を押した。

車夫は耳を藉さない。見ると、外國租界には違ひないが、こんな方から廻つて行けるのか知らと思つてゐると、眼の前の洋館に伊太利の國旗がはためいてゐる。

どうしても變だと思つてゐるうちに、車はあるお城のやうな建物の門前へ、急に、勢よく梶棒をおろした。

廣い中庭を前にしたそのクリーム色の總二階建は、輕快な圓柱をアーチで結んだ如何にも南國的な廻廊に取卷かれ、その廻廊のところどころに、軍服姿の白人が、或は談笑し、或は靴を磨きしてゐた。

云ふまでもなく、こゝは、伊太利駐屯軍の兵舍なのである。

間違ひもかうなると愛嬌で、私も一向不滿には思はなかつた。わざわざは來ないであらうところを見物させてくれたわけだから、賃銀を倍にしてやる決心をした。

やつとその邊を通りかゝるインテリ風の支那人に、手帳を出して"Talati House Hotel"と書いてみせたら、車夫にそれを説明してくれ、車夫は、さもがつかりしたやうな表情で汗を拭いた。

泰來飯店(タライアンテン)では私の顏を覺えてゐて、マネエヂャアもボーイも愛想よく迎へてくれた。

上海の外國租界では、かうは行かぬらしい。殊に香港では、うつかり日本人などは街を歩けないといふ話も聞いた。いや、そればかりではない。天津や北京でも、事變前の空氣はまるで違つてゐたやうである。ある日本

人が人力車に乘らうとして賃銀をかけあふと、普通なら十錢ぐらゐのところを五十錢出せといふ。で、それは高いと云つたら、そんならこつちが五十錢出すからお前車を挽いておれを乘せて行けと云つて、空嘯いたさうだ。

勿論、こんな話はざらにあつたらう。ところが、今では、それが信じられないくらゐである。日本人としては一應住みよくなつたと云ひ得る。が、それで安心はできないやうに思ふ。支那人の「時勢」に順應する力は恐ろしいものだといふことを知りさへすればいゝのである。彼等は、少しも變つてはゐないと、私は判斷してゐる。保身の術を心得きつた民衆の、季節的な化粧を見るばかりである。

たゞ、日本人などに、それがどうかすると彼等を與し易しと感じさせる場合がありさうだ。忍ぶべからざるを忍ぶ、その程度が、あまりにわれわ

れとかけ離れてゐるからだ。日本人ならば齒を食ひしばるであらうところを、彼等は、ポカンと口をあけてゐるのである。日本人なら、すぐに後を向いて舌を出すところを、彼等は、夜、寢床へはひつてからででもなければ、それをやらないだらう。

彼等が、日本軍の勝利をどう思つてゐるかといふこと、これは、さう一般的な問題として取りあげる必要はない。たゞ、支那を負かした日本が、將來、如何なる態度で、北支民衆の上にのぞむかといふ、そのこと自身が、彼等を永久の味方にするか敵にするかの分れ目だと思ふ。

彼等に民族意識や國家觀念がないといふ説も極端だし、彼等が抗敵精神に燃えてゐるといふ見方も度が過ぎるのではないか。すべては、日本人の標準で推しはかることは誤りのもとである。

歐洲のやうなところでも、つまり、あれほど近代國家としての發達を遂げた國々でも、さういふ點になると、案外、矛盾した現象を屢々見せつけることは、いろんな物の本にも現れてゐるのである。

モオパッサンの短篇など讀むと、普佛戰爭を題材にしたものが多いなかに、愛國精神と超國境的親和とが、同じ環境、同じ人物のなかに微妙な混りあひを示してゐることを誰でも感じるであらう。それは、或る場合には當然であるが、ある場合には、日本人の考へ及ばないやうな奇怪な場面をも繰りひろげるのである。

歐米人が戰鬪員と非戰鬪員の區別をあんなにやかましく云ひたてるのは、やはり、日本的感情ではちよつと始末のできないものがあるのであらう。

天津から北京への汽車は、平時と違つて、今は日に一度、それも、六時間たつぷり見ておかねばならぬ。

前線へ出るときとはまた違つた興奮を以て、私は、北京といふ「萬人渇仰の古都」を胸に描いた。

乘客は日本人が大部分を占めてゐるやうに思はれた。しかし、驛々のプラットフォームを見ると、大きな風呂敷包をかついだ支那人の數も相當に多い。

滿鐵の經營にうつつてから、この列車にも滿洲人のボーイが乘り込み、日本語があまり達者なので私ははじめ日本人だとばかり思ひ込んでゐた。

北京に近づくに從ひ、沿道の眺めは却つて物寂しく、秋の色が次第に深くなつていくやうに思はれた。それにしても、木の葉はまだ枝をはなれず、

黄一色の濃淡に染めわけられた大自然は、巧まない繪のやうに奥床しい。

が、いよいよ、北京の城門が見え、列車が驛の構内へ突入すると、私は、一種名狀しがたい錯覺に陷つた。

アメリカ國旗を立てた大型のバスが、處もあらうに、プラットフォームの上を悠々と走つてゐるのである。

巡査の棍棒

私がのぞいてゐる列車の窓口へ、GRAND HOTEL DE PEKINと金文字で書いた帽子をかぶつた男が首を出したので、私はこれに默つて荷物を渡した。

驛の出口には人力車が殺到して身動きができないやうな有樣であつたが、私はやうやくホテルのバスが待つてゐるのを見つけ、その方へ歩いて行つた。

バスが出るまで私はしばらく驛前の光景を眺めてゐた。

一人の巡査が棍棒を持つて群がる人力車を追ひ拂つてゐるが、前を追ひ拂ふと、後から、右を制すると、左からといふ風に、人力車は死にもの狂ひで客を目がけて突進して來る。巡査は、それらの車をいちいち押し返す。押し返されても、隙をみてまた走り出る。巡査は、いよいよ棍棒を振りあげる。相手はひるまない。すると、巡査は、躍起になり、聲をからして、地團太を踏む。しかし、振りあげた棍棒は、決して人間の上へは打ちおろされない。幌とか梶棒とかを申譯のやうに叩く。車夫たちは、だから、痛くも痒くもない。遮二無二、割り込まうとする。巡査は、最後の手段として、車の上のクッションを後ろへ放り出す。流石にこれは困るとみえ、車は一旦後ずさりをする。一度に幾十臺といふ車が駈け寄つて來ると、一人

の巡査では喰ひ止めやうがない。なかには、素早く客を拾つて走り出すものがある。巡査は恨めしさうにそれを見送る。

いつたい、どういふ規則になつてゐるのか知らぬが、かうまで巡査の威令が行はれないといふのは、抑も事變の影響であらうか。

それにしても、相手は人民、こつちは、役人である。職權をもつて、取締りができぬわけはなささうに思はれる。「斷乎たる」處置をなぜ取らないであらう。

焦れつたい話である。が、事實は、この通りで、巡査は堪忍袋の緒を切らず、車夫どもは反抗の限度を守つてゐるのである。

從つて、最初はすさまじいものだと思つてゐたのが、だんだん、なんでもないことになり、いつたい構内人力車取締規則といふやうなものがあれ

ば、それをちよつと聞きたいものだと、私はひとりでに微笑が浮んで來た。

誠に支那といふ國は妙な國である。かねて規則ぎらひとは聞いてゐたが、かうまで世話がやけるなら、もうちつと方法がありさうなものである。私が云ふのは可笑しいが、ちやんと駐車場でもこしらへて順番に車を呼び出すやうにすればなんでもないぢやないか。お巡りさんも、自分でそれぐらゐの智恵をしぼりさうなものである。ところが、そんなことは考へもせず、さうかと云つて、不埒な人民に棍棒の一撃を喰はすでもなく、たゞ、その時々に、效果の少い同じ骨折りを繰り返してゐるのは、悠長千萬な話である。しかし、見やうによつて、これこそ馬鹿にならぬ風習だと、私はつくづく感じ入つた。なぜなら、人力車夫の取締は罰則を設けさへすれば容易にできるが、巡査が、彼等の無秩序を「毆つて」まで懲らしめようとしな

い、その平和主義は、一朝一夕の訓練で得られるものとは思はれないからである。

もちろん、その反面には、萬一、巡査が暴力を振つたとしたら、あとの祟りが怖ろしいといふやうな事情があるかも知れぬ。それはつまり警察力の微弱を語るものであらう。

問題は、だから、そんなところにあるのではなく、かゝる無秩序そのものが、支那人の神經をさほど焦らだたせないのだと見る方が當つてゐるかも知れぬ。それゆゑ、どうかしたらよささうなものだと思ふのは、實は、こつちが見るに見かねてさう思ふのであつて、支那の巡査は、なに、これぐらゐのことはなんでもないと、案外、芝居をするやうなつもりで、ひと通りの役目を果してゐるのだとしたら、更に、支那といふ國は、恐ろしい

國だと云はねばなるまい。

バスには私のほか、四五人の日本人が乘り込んだ。こつちも別に口を利かうとは思はず、向ふも、私の存在に注意を拂ふ樣子はない。同じ外國の旅でも日本が近すぎ、日本人を見あきてゐるせゐであらう。

古色蒼然たる大型バスを、でつぷりと肥つた運轉手が、急がず慌てず操縱する。乘心地はさうわるくない。

厚い壁の上に葉の細かな並樹がしつとりと枝を垂れ、街は人通りがすくなく、乾いた路面が煙つたやうに長く續いてゐる。朱塗りの門をはひると、公園のやうな廣場へ出るが、そこはもう、北京ホテルの前庭である。

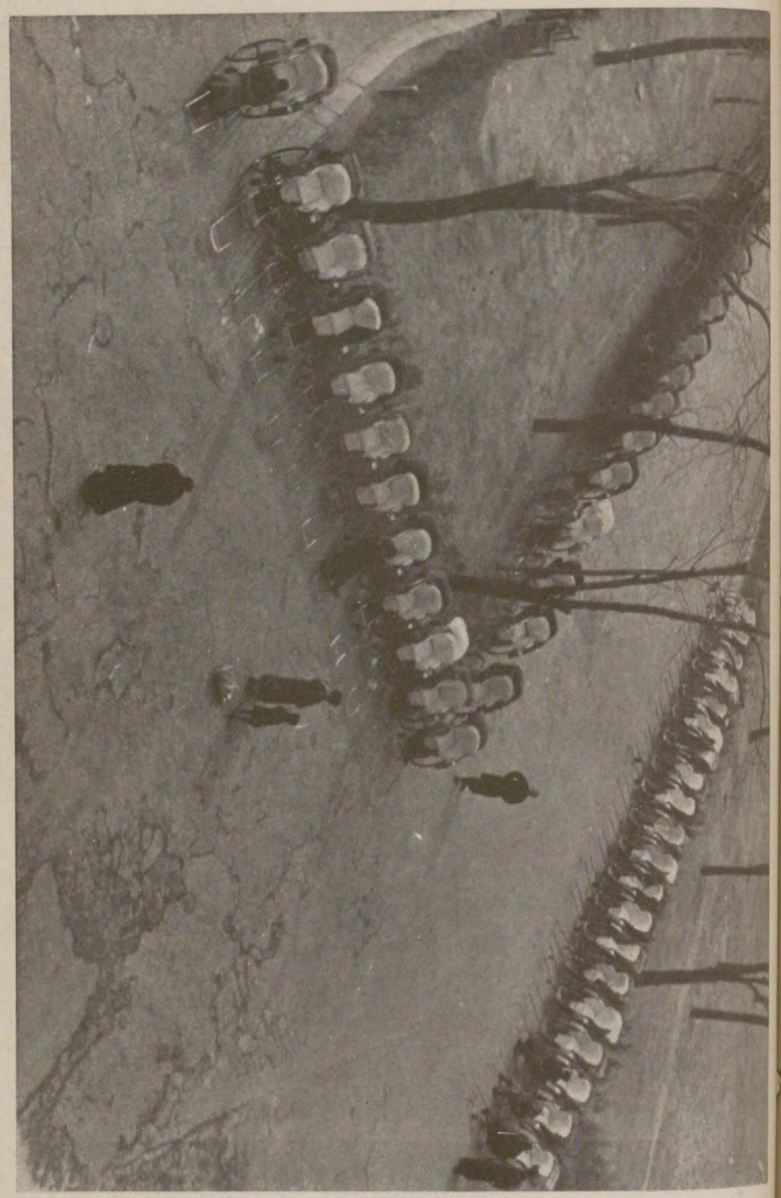
堂々たる四階建の洋館が、なんと、がさつに見えることか。正面の廻轉扉を押すと、中は國際色に滿ちた大ホールである。西洋人の幾組かが茶を

飲んでゐる。日本の將校が二人、中央の階段を駈け上る。帳場では、英佛日支の國語がちやんぽんに使はれてゐる。兩替をするところがある。歐洲語書籍の賣店がある。土産物の陳列棚と、その番をしてゐる支那娘がある。

私は三階のひと部屋をとつた。

このホテルは日本婦人を細君にしてゐるフランス人が經營してゐるのだといふ話を聞いてゐた。そこで、はしなくも、私は近代支那の一享樂主義者が發した言葉といふのを思ひだした。曰く、「この世の幸福は、洋式の部屋に住み、日本の女を妻とし、支那料理を食ふことに盡きる」と。

ボーイがぞろりとした支那服で、怪しげなフランス語を使ふのをみてゐると、こつちは馬鹿に氣が樂になる。嘗ての放浪癖が頭をもたげて、早くも、私は、「故郷を失つた人間」の氣持にひたる。



北京ホテルの前庭

慈善興行

日本を發つ時、阿部知二君から、北京へ寄るのだつたら是非この人に會へと、わざわざ紹介の名刺を貰つて來てゐるので、ともかくそのS・O氏と連絡をとることにした。何時何處でお目にかゝれるかと手紙にしてメッセンヂャア・ボーイを走らせたのである。すると、間もなく、こつちから出向くといふ丁寧な返事に、私は大いに恐縮した。

O氏は、支那文學を專攻する慶應の若い教授で、なんの豫備知識もない

私に、「これが北京だ」と敎へて誤らざる人だと阿部君はにらんだのであらう。

事實はその通りで、私の勝手氣儘な註文にも拘らず、實用と趣味の兩方面から、極めて豐富かつ適切なプログラムを作つてくれた。

私は先づ、滯在日數の極めて少いこと、「事變」に關係ある範圍で會ひたいと思ふこれこれの人々があること、名所舊跡はこの際强ひて見たいと思はぬこと、それよりも「北京の現代相」といふやうなものについてひと通りの概念を得たいこと、序があつたら古物商を一二軒のぞいてみたいこと、等を述べたのである。

北京へ來て名所舊跡を二の次ぎと考へる私の料簡を、氏は多少遺憾に思つたらしい。私もまた、それは好意ある案内者への禮でないことをぢゆう

ぢゆう知つてはゐるが、今度の旅行の目的を忘れてはならないのと、もうひとつは、從來の經驗に徵すれば、私は、所謂名所舊跡といふものに接して、眞に心を豐かにした記憶がないのである。

それはさうと、O氏は、同伴の支那劇研究者H・N氏を私に紹介し、その晩、丁度いゝ芝居がかゝつてゐるから、一緒に觀に行かうと云ふ。そして、晩飯は、兩氏の宿で家庭料理を御馳走しようといふ、結構すぎる提議に、私は快く應じた。

さて、その芝居であるが、當夜は、北京市政府社會局主催の義務戲（慈善興行）の第二夜で、しかも、二日しかやらぬその興行は、年に一度のオール・スタア・キャストだとのこと、北京の名優をかうして並べてみられるのは運のいいことだと云へば云へる。

元來、私は支那芝居といふものを、專門的な立場からもあまり重要視してゐないし、嘗て上海で觀た相當いゝ芝居といふのも、その時の印象では、ちつとも面白くなかつたのである。勿論、研究をした上での批判ではないから、大きなことは云へないけれど、形式から云へばまづ歌劇の部類にいれるべきであつて、「演劇そのもの」としての價値は低いものと斷言して憚らなかつた。殊に、歌詞がまるで解らないと來ては、音曲としての緣遠さは別にしても、われわれの興味を惹く何ものもないと高を括つてゐた次第だ。

ところが、N氏の說明をきゝ、臺本のあらましを讀み、俳優の閱歷、藝格など、大急ぎではあるが大體呑み込んだ上で、いざ、舞臺を眺めてゐると、こいつは馬鹿にならんぞといふ氣がして來た。

觀客席は超滿員である。しかも入場料は、平生とくらべものにならないほど高いのである。支那人、殊に、北京人の芝居好きは底知れずと云はれるだけあつて、國家の安危を打ち忘れての陶醉ぶりである。

最員役者が出て來たり、いはゆる「見せ場」「聽きどころ」といふやうなところへ來ると、あちこちで、「好々(ホーホー)」と聲がかゝる。

椅子席の前に、狹い板が渡してあつて、それが卓子の代りになる。賣子が茶を持つて來る。菓子や果物を置いて行く。いらぬと云つてもなかなか承知しない。

舞臺では、三國志の一節が物語られてゐる。「擊鼓四馬曹又は群臣宴」といふ外題である。女優が髭の生えた男の役をやつてゐる。

舞臺裏から平氣でこつちをのぞき込んでゐるものがある。それどころで

はない。舞臺の隅へはみ出して來る奴がゐる。道具を出したり引つ込めたりする男が、早く云へば小道具方が、まるで自分の家を片づけるやうな歩きつきで、役者の間をうろつき廻る。

ひと節歌ひ終ると、役者は後ろ向きになつて差出された湯呑みの湯を一杯飲む。口髭のあるのは、その口髭を頤の下へ外すのが見える。女の役は、それでも、袖屏風をつくる。

支那芝居の講釋は怪しいからやめる。名優と云はれてゐる二三人は、なるほど、役者としての魅力で私を惹きつけた。程硯秋といふ女形は、N氏に從へば、「現在北京で聽かれる名旦中での第一人者、その名海外に知られてゐることは梅蘭芳に次ぐ」とのことだが、次に紹介する「珠痕記」といふ芝居のなかで、春登の妻に扮し、遺憾なくその才色を示したやうに思つ

た。

支那芝居の面白さは、N氏ぐらゐにならないと、外國人には隅々までわからぬことは當然と思はれるが、とにかく、かういふ種類の芝居を今もつて無上のものと心得てゐるところ、支那の好みが窺はれて、それだけでも大いに參考になつた。

試みに、多分N氏の筆になるものらしい當夜の番附にのつてゐる上記「珠痕記」の筋書を寫してみる。

人物

朱春登　　老生　譚富英

趙景棠（春登の妻）　青衣　程硯秋

中　軍（春登の部下）　淨　　侯喜瑞
朱春登の母　　老旦　文亮臣

山東の人朱春登は叔父に代つて出征し、老母と妻君を家に置いて、十數年歸つて來ない。其間に叔父は物故し、從弟の春料は科擧の爲め京都に流寓する。それで春登の叔母宋氏は家政を壟斷し、春登からの音信を沒收して、趙氏には春登が既に戰死したと僞り、自分の甥宋成と再婚するやうに迫る。趙氏が肯じないので姑と一緒に追出される。二人は初め羊を飼つて糊口してゐたが、終にそれも出來なくなつて乞食になる。

一方春登は戰功を建て、平西侯に封ぜられ、春料も官を得て、兄弟揃つて故郷に錦を飾る。宋氏は春登に、彼の母も妻も既に死んだといふ。斷腸の思ひで春登は母の靈前に痛哭する。此處の唱は中々聽ける所である。至

親を失つた春登は失望落膽、出仕の意なく、隱遁せんと決心する。その前に故人の冥福の爲に我家の墓前で蓆棚を設け七日間の施食をやる。其時既に遠地に流離してゐる趙景棠とその姑は、神力に助けられ、蓆棚の前へ來て、何も知らずに乞食する。食べてゐる中に、墓前にある槐の木を見て我が家の祖墓なるを知り、吃驚して碗を落す。その爲に中軍に酷く叱られるが、中軍は貧民をいぢめたかどで却て春登に罰せられる。さて春登が件の乞食を呼んで事情を聞いてみると、どうも自分の妻君らしい。終に我が妻の左手に赤いあざのあつた事を思出し、乞食の手を見せて貰ふ。間違ひない。それで愈々名乘つて母親にも邂逅する。珠痕記なる名前を得た所以である。この夫妻相認の場が此芝居の絶頂で、譚富英と程硯秋とのコンビは得難い絶唱である。

再び母と妻を得た春登は叔母を呼んで問ひ糺すが、中々泥を吐かない。おまけに、「自分に若しそんな事があつたら龍にさらはれてもよい」と天に誓ふ程の圖太さであつたが、誓ひの言葉が未だ終らない中に、本當に龍にさらはれて行く。

筋は他愛のないものだが、歌を聽くのが主だと云はれてみれば、それまでの話である。しかし、歌を唱ひながら、それぞれの役柄に應じて、型の如き身振りをするのだが、その身振りは、身分、年齢、性格、殊に、青年男女の性的魅力を、極めて端的に、しかも微妙に現はすこと、わが歌舞伎劇の手法に酷似し、更に私の觀察では、若い女の媚態を形づくる線の動きは、不思議に日本の傳統的な女性美の標準と一致するものがある。云ひ換

へれば、西洋の如何なる芝居に出て來る女も、コケットな表情の百姿百態を通じて、まつたくこれと共通したものをもつてはゐないことを注意すべきである。

それともうひとつは、役者の見得の切り方であるが、あの瞬間の動きと「きまり方」の呼吸は、これまた、日本の歌舞伎と支那劇との性格を近づけてゐる。

この發見は、恐らく、私を途方もない假定に導くやうに思はれる。といふことは、わが歌舞伎劇なるものが、案外、今日まで信じられてゐるのとは反對に、直接支那劇の影響を受けてはゐないかといふことである。

さもなければ、兩國民の傳統的な生活感情は、種々相距る外貌をもつに拘はらず、少くとも、異性理想化の一點で、隣國に應はしい接近を示して

ゐると云はなければならぬ。

まあ、この議論は將來N氏にお委せするとして、私の支那芝居見物記はこのへんで切り上げることにしよう。

女學生の作文

忘れようと思つても忘れられません。私達はいつ迄も七月二十七八日の爆聲を記憶するでせう。

あの日私の父は私達に言ひました。

「我々は明日は天津に避難しよう」

しかし私達は父に反對して言ひました。

「あたしは行かない。同に國難に赴くのよ」

私達だつてやはり死にたくはありません。しかし避難、この二字はどうも聞き苦しい。

數日たつて新聞に天津の戰禍が報ぜられてゐた。

「嘎呀(ヤレヤレ)、天津に避難して行つた人はみんな死んぢやつたよ」

と、父はこの一語を云つてニッと笑ひました。

× ×

私の家には姪が澤山にゐます。私よりたつた一つ年下の姪は或日旗行列に參加しました。彼女は一日中街を歩き廻つたので迚も疲れてゐた。

「お前達はどこへ行つたの」

私がかうたづねたけれども彼女は答へなかつた。室の中が一種の淋しい空氣で一杯になつた。私は二度と訊かなかつた。

暫くすると彼女は自分から旗行列の感想を話しだした。

「今朝私達は學校に行つた。しかし何のためだか知らずに行つた。先生が來いと云つたから私達は行つた。

校長先生は一言ものを言はない。たゞ沈默のうちに私達に旗を渡した。私達學生も旗を受取つて一言もきかうとしなかつた。旗の上には『○○○○○』と書いてあつた」

校長も說かず、生徒も問はず、各人が暗默の裡に旗行列に行つたのださうだ。

私はこの姪の言葉を聞いて心中非常に痛快であつた。

「叔母さん、あんたの學校は何故行かなかつたの」

彼女が私にかう訊いた。

「私の學校は行かなかつた。去年お前達の學校が排日のデモンストレーションの時にも私達の學校は行かなかつた。去年お前達は大きな聲で旗を振上げながら『みんな起ち上れ(大家起來)』の一句を叫んだではないか。しかし私達の學校は參加しなかつた。それだから今日もやつぱり參加しなかつたのだ」

「叔母さんの學校はいゝわね」

「去年お前達はどう云つた、私はおぼえてゐるよ、あなたの學校は不好(ブーハウ)と云つたでせう」

「……」

「お前達は知つてるの、お前達の排日デモンストレーションが今の戰爭を惹き起したんだつてことを」

姪は首を垂れて何も云はなかつた。しかし心中甚だ不安の樣だつた。

× ×

うちの兄がラヂオを一つ買ひました。米國のフィルコ會社の製品ださうだ。一寸ヒネつて燈をつけると、世界各國の音樂が聽けるさうだ。そのラヂオは大變高い。兄は三百圓つかつたさうだ。

兄はなぜこのラヂオを買つたかといへば、英米の放送局の音樂をきゝたいからではない。私は夙(とう)から知つてゐる。彼は南京の放送局からニュースを聽かうとしてゐるのだ。

「駄目だ、聞えない」

或晩、かう叫んで彼は癇癪を起した。

「誰かゞチーチーペンペンとラヂオの放送を邪魔してやがる。一言も聞

えやしない」

兄はそれからスヰッチをヒネつてもみない。ラヂオは床の上に淋しく立つてゐる。その函の上には埃が一杯たまつてゐる。

私はこのラヂオを見て、

——國家の地歩はどこ迄落ちゆくのであらう(國家地歩落到那邊)——

と、獨り問ひ獨り嘆じて心中不安に堪へないものがあつた。

これは、北京の崇貞學園といふ邦人經營の女學校を訪ねた時、校主の清水安三氏が私に譯しながら讀んで聞かせてくれた一生徒の作文である。「時局感想の斷片」といふ題がついてゐる。

清水氏の事業と、事變勃發當時のその行動を、私は氏の發表した文章で

知つてゐたから、北京に着く早々、同學園を參觀かたがた、氏の話を聽かうと思つて、朝陽門外の東堂子胡同といふところへ出掛けて行つた。

附近は場末らしいごみごみしたところであるが、學園は二階建の瀟洒な洋館と、これに續くバラック二棟がわりに廣い敷地のなかに建てられてゐる。

全級を六級に分け、小學から中等科程度の教育を施すやうになつてをり、生徒は悉く支那少女ばかりで、先生も私の見かけたところでは、若い支那婦人のみのやうであつた。

清水氏は基督教の牧師であり、支那の貧民の子女を、彼地ではまつたく望んでも得られない文化的恩惠に浴せしめようといふ發意から、この學校の經營を始めたのださうである。十數年の闘ひの後に、遂に、こゝまで漕

ぎつけたのだと、氏は述懐しながら、綺麗に磨かれた校舍のなかを案内してくれた。

「事變後、生徒の數は變りはありませんか。多少減つたでせうね」

私の問ひに、清水氏は、得意らしい微笑を浮べ、

「ところが、ちつとも減りません。なるほど、例の通州事變の後、一時、この界隈に匪賊化した敗殘兵が出沒して、夜道はむろん危險ですし、何處の家でも戸を閉めて子供を外に出さないことがありました。それが一週間も續きましたかな。この間、生徒がぐつと減りました。が、それも、だんだん落ちつくに從つて、もともと通りになりました」

「すると、生徒の父兄は、この學校を信じきつてゐるわけですね」

「事變前の空氣にくらべて、今は却つてよくなつてゐるくらゐでせう。私

の仕事も、ですから、ずつと樂になると思ふんですが、或る意味では、かういふ特殊な事情を背景に、自分の仕事を發展させる野心など私にはないのです。寧ろ、これからは、もつと奥へはひつて行つて、未墾の土地へ根をおろさうかと思つてゐるくらゐです」

「こゝで女學校程度の教育を受けたものは、どういふ將來が約束されるのですか」

「なにしろ、殆ど家庭的には恵まれない女の子たちばかりですから、大がいは、職業につきます。希望者は日本へ送つて高等の教育を受けさせるやうにしてゐます」

「今、讀んでいたゞいた作文で、ほゞ見當はつきますが、日本といふものを、どういふ風に考へさせるかは、なかなか、むづかしい點ですね」

「さう、それです。私は、直接に日本の宣傳はいたしません。日本人の一人が、獻身的に、支那人の幸福と利益とを計つてやつてゐるといふことが、なにより日本をよく理解させる結果になると思つてゐます。私は、修身の時間に、よく、あなた方はもつと自分の國を愛さなくてはいかん、と云つて、生徒の愛國心についても、良心的な指導をしてゐるくらゐです。實際、こゝに來てゐる女の子たちは、支那といふものに對して無關心なのが多く、私はそれを心配してゐます。今の作文が、まづ例外と云つていゝくらゐ、支那人としての氣持を表はしてゐると思ひます」

「支那側から學校に對して、何か干渉めいたことをしませんでしたか、事變前など」

「いろいろありました。しかし、いやがらせ程度のことで、別にそれ以上

の壓迫はありませんでした。とにかく、父兄の支持は今日では絶對です。といひますのが、たゞで學問を敎へてやるばかりでなく、家の手助けにレースを編むことを敎へてゐますから、それがだんだん一軒一軒ひろがつて、近頃では、この界隈の名物のやうになり、年々相當な金がはひるのです。數年前は貧民窟であつたのが、今では、裕福な暮しをしてゐる家が隨分あります」

「さうして支那の少女たちにいろいろなことをお敎へになつて、これはちよつと勝手が違ふなとお思ひになつたことはありませんか」

「さう、一度、ずつと以前ですが、どうも理由がわからずに生徒が減つて來るので、不思議だと思つて調べてみると、父兄の間で、こんな意見がひそかに持ち上つてゐたことがわかりました。といふのは、あの學校はほか

に不滿はないが、たゞ習字に力を入れんから困る。習字といふのは、支那では大事なんです。私は、それをうつかり忘れてゐました。といふより、今の時代にそれがそんなに必要なこととは思はなかつたんです。ところが、父兄にとつては、子供が、學校へ行きながら字が何時までも上手にならなくては困るんです」

「生徒の顔をみると、みんなそれぞれに好い顔をしてゐますね」

「どれも可愛らしい顔をしてるでせう」

傍らからO氏が附け足した。

「北京といふところは、かういふところです」

つかめない文化工作

現地に於ける文化工作のイデオロギイといふやうなものを聞ければ聞きたいと思ひ、私は、二三の日本側の主要人物を訪れた。

誰がどう云つたといふことをこゝでいちいち言ふ必要はあるまい。

——雜誌に書くんだらう。それぢや、話すわけにいかん。もう少し待つてくれ。

——文化工作なんて、まだ早いよ。なんにもそんなことは考へてゐな

い。今は戰爭の最中だ。非文化的なことをやつとるんだ。毀す一方さ。ハヽヽ。

——われわれは、戰爭の方は引受ける。あとは、誰か出て來てやつてくれるだらう。

——いつたい、內地で、かれこれ云ひすぎるよ。一種の自己滿足だ。知識階級にはさういふ傾向が多くていかん。こいつは相手を乘ぜしめる隙になるといふことがわからんとみえる。怪しからんよ。當分、出先のものに委せておいたらどうだ。

——大學か、大學なんか、こゝにはいるまい。奴らにそんな智惠をつけてなにになる。だが、これや、まあ、どうなるかわからん。

——自然發生的なものが一番いゝと思ふんです。そのうちから、われわ

北京大使館前

北京の日本軍

れが、これとこれといふ風に撰擇するより外ありますまい。無理に作り上げたり、お膳立てをしてやつたりする方法は避けたいと思ひます。

――文化工作は、今着々計畫を進めつゝありますが、抑も北支なるものは、歴史的、地理的、風俗的に、支那の他の如何なる部分とも區別さるべき特性があることは云ふまでもありません。從つて、政治、經濟、文化の諸部門に於て、その特性を生かすことを先づ考へねばならず、それがためには從來の對支觀念を清算して……。

――役人のやることは一から十まで駄目、民衆と民衆との結びつきを土臺として、將來の北支文化なるものは建設されなくてはならんと思ふのですが、それがためには、……云々。

内地ばかりでなく、こゝでも、かれこれと云はれてゐるのを、私は當然

なことゝ考へた。

みんなが眞面目に日本と支那のことを考へてゐてくれるなら、私ごときが、なにも心配することはないといふ結論に達し、なまじ好い加減な豫想など植ゑつけられないうちに、遠くから大勢の定まるのを見てゐた方がわれわれには面白いかも知れぬと、私は、ひとまづこの政治的雰圍氣から逃れ出た。

O氏は、私の公用(?)が濟むのを、いつもほつとしたやうに迎へてくれる。

「さあ、これからどこと、どこを廻つて……」

といふ風に、なかなか時間を無駄にしない。

「えゝ、えゝ、あとは君の連れて行つて下さるところへ參ります」

と、私は、心の中で答へる。

が、もう日が暮れかけて來た。

連れて行かれたのは、清華大學教授、日本文學に精しいといふ錢稻孫氏の家である。

この種の會見は、私の方では全く北京へ來るまで勘定に入れてをらず、從つて、質問の準備もない。第一、私は、この事變下の感情をなんと云ひ現すべきかを知らないのである。月並に、「誠に困つたことになりました」とでも云はねばならぬとすると、それは、一層困つたことである。

「初めまして……」

と、私は日本流に挨拶した。

錢氏の溫厚君子の如き顏は、心もち緊張したやうに見えた。

「何時こちらへおいでになりましたか？」
「は、昨日……」
と、外國人らしく私は答へた。が、何しに來たと訊かれない先に、私は、率直に、旅行の目的を述べ、北京で先生にお目にかゝれたことは、この旅行の一大收獲だとお世辭を云つた。
やはり、なんとなく、話がしにくいのであらう。錢氏は、いく度も眼をつぶつて考へ込んだ。
「今度の事變は國民と國民との爭ひではないと、兩國の政府は聲明してゐますが、私もそれを信じた上で今度の旅行を思ひたちました」と、私が云ふ。
「日本も支那も、この機會に、なすべきことはたゞ二つだと思ひます。卽

ち、忘れること、反省すること、たゞこれだけです」
「先生の御意見は、甚だ東洋的で結構だと思ひます。私は、御國の知識階級が殆ど北京を去つてしまつたといふ話を聞いて、非常に悲しく思ひました。この狀態は永く續くでせうか？」
「さあ、わたくしにはわかりません」
「先生はイタリイにもおいでになつたさうですね」
「父が公使をしてをりましたから……」
「ずつと北京においでになるおつもりですか」
「なんにもすることがなければ、田舍へ引つ込みます。私の眼の前は、いま、眞つ暗です」
相手を識らなければ、何を話してもまづいやうな氣がして、私は遂に默

つた。錢氏の今までの仕事について、皆目知識がないことを私は悔んだ。なんでもダンテの「神曲」を譯してゐるといふことは知つてゐたが、話を六百年前に戻す法はないのである。

O氏が、四方山の話をしてくれる。

その間、私はぼんやり、部屋の隅々を見廻し、支那文人の住居らしい、それでゐて、どことなく歐羅巴に通ずる何ものかをひそませた生活樣式に興味を覺えた。

不躾な訪問を謝して外に出ると、細い露地は暗く霞んで、街の子らが車の周圍を取卷いてゐる。

誰がなんと云はうと、この風雲の下で私と錢氏との立場は明かに違つてゐるのである。萬が一、彼の眼に、戰捷國民の思ひあがつたひとつの顏が

映つたとしたら、私は穴にでもはひりたい。

代表的な北京料理を食べたいといふと、O氏は、それなら、食通のW君を呼んで獻立の註文をしてもらはうと云ふ。それほどのこともあるまいと思つたが、W君といふのは日本に留學してゐたお醫者さんで、氣骨のあるさつぱりした人物だといふから、話ができればそれも面白からう。

料理屋の名は忘れた。所謂「うまいもの屋」といふに應はしい小さな構への、體裁お構ひなしといふ店である。屏風で仕切つた奥のテーブルに着く。

W君はやゝ遲れてはひつて來る。

ざつくばらんな調子で、いきなり現在の心境を語る。

「しかし、いま北京にゐるといふだけで、僕などは、南からは睨まれてゐるでせう。うつかり上海へでも行かうもんなら、首がなくなるさ。北京も

變るでせうね。どう變るか。北京人は北京が好きなんだから、そのつもりで、あんまり減茶なことはやらないでほしい。僕は政治なんかに興味はない。だから、まだいゝ、かうして平氣でゐられるんです。こゝまでは民衆も默つてついて來るだらう。あとを、日本がどうするかだ。どういふ態度で民衆にのぞむかです。被征服者扱ひはよくない。忍ぶといふことにも限度があるからね。この間、保定が陷落した時、ほら、こゝで旗行列をやつたでせう。誰が考へ出すかね、あゝいふことは？　上の方ぢやない、それはたしかだ。行列に加はつたのは、小學校の生徒とあとは……。まあ、これや大した問題ぢやないがね。僕は、看板と標札を外して天津へ行つてたよ、その日は……。……れないからね、かういふことは。日本のためにも考へるべきことですよ」

料理が運ばれた。豆腐と茸の清汁、鰻のシチユウなど珍味である。

「日本には、僕の尊敬する先生もをられるし、世話になつた人達は、みんな僕の心のなかに永久に生きてゐる。日本にゐる日本人は、懐かしい。だが、北京はどうなるのかね。僕が住めなくなるやうな北京に誰がするのかと思ふと、淋しい氣がするね」

彼は急に聽き耳をたてる。そして、私たちの方へ、眼で用心しろといふ合圖をする。何者かが祕かに私たちを狙つてゐるとでも云ひたい表情である。私は、正直なところ、ギョッとした。「藍衣社」といふ言葉が咄嗟に頭に浮んだ。

「あの話聲は日本人ぢやないか」

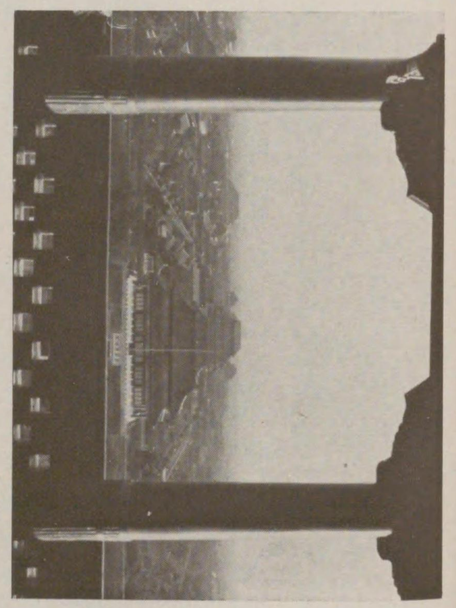
さう云つて、屏風の向うを頤で指し、W君は大きく眼をむいた。

市中見物

翌日は自動車で市中を見物した。

民衆娯樂場とも云ふべき鼓樓では、車を降りて屋臺店の間を縫ひ、掛小屋の芝居をのぞき、文字通り支那群衆に取り巻かれて、私は少しも不安を感じなかつた。勿論、それはO氏の平然たる態度に影響されてのことであるが、この印象は貴重なものであると信じる。假面は假面であらうとも、それはもはや假面としての欺瞞性をもたないところに達してゐるのである。

北京市街風景



紫禁城全景

名所舊跡も此處だけはといふので、今は公園になつてゐる舊王城の内苑に杖を曳き入れた。

一番高い丘の上から見おろす天下の名宮は、たゞ仰々しく子供じみ、秋の陽を浴びて五彩に輝く棟の重疊が、怪奇な歴史を祕めてはじめて感傷の一つ時を愉しましめるていのものである。

これに反して、半ば色の褪せた廻廊を傳ひ傳ひ、廣々とした池のほとりへ出ると俄然、趣きが一變する。

幽邃とは云へぬが、物寂びた豐かな眺めである。

渡し船がある。切符を買つて、それへ乘り込むと、あとから、伊太利の水兵七八人が、どやどやとはひつて來た。

一人が寫眞機を取出して、仲間を寫しにかかつた。われわれは邪魔にな

らぬやう席を立たうとすると、そのまゝでをれといふ合圖をする。
「君たちは天津からやつて來たのか？」
とフランス語で問うてみたら、
「さうだ」と答へた。
更に、私は、訊ねた。
「われわれが日本人だといふことを君は識別し得たか？」
「もちろん」
と、その水兵は愛想のいゝ返事をした。そして言葉をついだ。
「われわれは今度の事變で、こつちへ送られて來たのだが、君たちの國へも是非行つてみたい」
「君たちの艦長がそれを欲しさへすればいゝのだからね」

と云つて、私は笑つた。すると、その問答の意味を仲間に傳へたらしく、みんな聲をたてゝ笑つた。
私は調子にのつて、
「僕は歐洲大戰の直後、伊太利へ旅行したことがあるが、南部チロルのメランといふ町は、丁度、君たちの國の軍隊が占領してゐて、君たちが今、天津や北京でみるやうな光景を呈してゐた。チロルの平和な自然と國民的デモストレーション……。軍樂隊のマーチがいつまでも耳に殘つてゐるよ」
通譯がすむと、一同は、大きく眼を見張つていくどもうなづいてみせた。氣持のいゝ青年たちであつた。
船が對岸へ着くと、彼等はめいめいに擧手の禮をして立ち去つた。

私が空腹を訴へると、O氏はかねてそのつもりでゐたらしく、

「そこに仿膳といふ飯館(ファンカン)があります。これはつまり、宮廷風庶民料理を專門にやる店で、例の西大后の好みから特に宮中でさういふ獻立を作らした、それがこの店に傳はつてゐるのです。ひとつ試してごらんなさい」

といふわけであつた。

吹きさらしの前庭に、いくつかの食卓が並んでゐて、公園のレストランとしての趣をそなへてゐる。

輕いランチではあつたが、いく品かの菜汁にそれぞれの工夫を凝らしてあることがわかつた。しかし、料理に關する限り、私は形容の言葉に窮するから、あとはどなたかよろしく。

日が傾くと、水が近いせゐでもあらうか、風がやゝ冷たくなつて來た。

私は外套の襟を立てゝ歩きだした。樹立のなかにゐて、木の肌のなんと目立たぬ色をしてゐることか。幹は悉く小枝と葉のひろがりに席を讓つたのである。自然が常に煙つてゐるやうに見えるのはそのためであらう。

自動車は裏町へさしかゝつた。土地の起伏につれて、波形につゞく白壁の美しさ。曲りくねつた凸凹道も、こゝでは、往き惱むわれらが自動車のはしたなさを思はせるばかりである。

こゝは女學校と聞いても、それは昔の大官の住居にも似て、門は嚴かに閉つてゐる。居酒屋風の燻けた店の前に、長い煙管を銜へた男が二人立つてゐる。千年前からそこにさうしてゐたかのやうである。

賑かな大通りへ出た。道傍で物を賣る商人は支那の名物であらう。古物商を一二軒のぞいてみた。掘出し物などしようといふ肚はないが、安い土

産でもあればと思つてである。これはと思ふものがまるで見當らぬ。蒙古鐙の貧弱なのが手にはひつた。

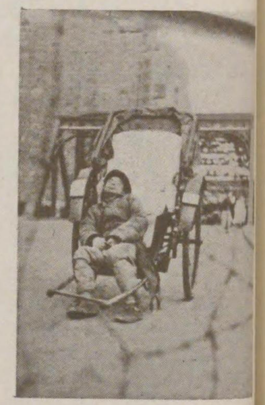
下手ものならば天橋（テンチャウ）に限ると聞いてゐたので、O氏に案内を頼む。城門に近い、云はゞ場末の古物市場である。

このガラクタの堆積はまづ見ものである。毛皮から勝手道具まではいゝが、その先は、空壜の數々、氣をつければ古新聞の束でさへおいてないとは保證できぬ。大通りを挾んで蜿蜒數丁に亙るこの光景は、巴里蚤の市の比ではない。私は疲れた。一軒で絨毯をひろげて見たら、次ぎ次ぎの店から、「いゝのがある。はひつてみろ」と呼びかけられるのには閉口した。

名刺を作りたいといふと、O氏は勸工場の樣に色々な店の並んだ建物のなかへ連れて行つてくれた。名刺はまる一日かゝるといふので、すぐに使

北京の支那民衆

露店風景



夫車する廢畫

ふ分を二三枚別にその場で書いて間に合せようと思つた。が、ふと、私は、その字を店員の支那人に書いてもらふのが面白いと氣がつき、そばにゐる一人に、それを頼んだ。すると、その先生はにこにこしながら早速筆を取りあげた。餘程うれしかつたとみえる。子供のやうな緊張ぶりである。出來上つた字は、流石に立派であつた。

その夜は、本場の羊料理、かの豪快な炙肉の立ち食ひを試みた。ヂンギスカンとは日本人の命名ださうだが、沙漠に開かれる軍旅の夜宴は連想としてまづくない。羊料理の店は給仕の少年までみな回々教徒だといふことをはじめて聞いた。

座談會

○○○○室のB氏が人選をしてくれ、北京を發つ前の晩、ホテルへ若干名の支那人を招待した。半ば特派員としての資格ではあつたが、半ば個人として北京在住の所謂「インテリ」に會つておきたかつたからである。多少でもはつきりした思想的立場をもつてゐる人はどうかと思はれたが、集つた顔ぶれは、左の通りである。

柯政和（東京音樂學校卒業、北京地方維持會專門委員、華北教育總會總務組組長、北平師範大學教授、四十八歳）

關瑾良（日本明治大學法科卒業、北京警察局祕書、地方維持會公安組第一科長、三十五歳）

劉家驤（北平大學卒業、北京競報社々長、亞洲文化促進會副主任、中聞通訊社々長、二十八歳）

鮑澂夫（北平大學卒業、每月評論社々長、亞洲文化促進會常務委員、二十七歳）

胡蒞棕（朝陽大學法科政治系卒業、反共戰線社々長、二十六歳）

このほかに、文學者として、周作人氏にも出席してくれるやう、私は晝間わざわざ同氏を訪ねて、その了解を得ておいたところ、丁度、周氏が家を出かけた時刻に、勅使が着かれたといふので全市に戒嚴令が敷かれたた

め、もうちよつとのところで通行禁止に遇ひ、たうとう、あと戻りをしなければならなかつたといふことを電話で知つた。

日本人側は、私と外務省文化事業部囑託の橋川氏との二人。話がすんで晩餐の席には、O、N兩氏にも出てもらつた。

關瑾良氏が日支兩國語のそれぞれ飜譯をしてくれることになつてゐ、同氏は座談會のための速記者をちやんと連れて來てゐた。

さて、豫め席を設けさせた別室で、私は挨拶を述べた。

「私はこの度、雜誌文藝春秋の特派員といふ資格でこゝへやつて來ました。しかし、私は元來、ジャーナリズムのエキスパートではありませんし、さういふ角度から、この事變の現地報告をする能力も興味もないのです。

私はたゞ日本の一作家として、戰亂の地を訪れ、自分自身のためにも若

干の新しい體驗を、また、私の讀者のためには、なるべく冷靜に今度の事變の性質、及びその結果を考へてみる材料をもたらしたいといふのが、本來の希望であり、任務なのであります。

實は、十分の暇がなく、非常に短時日の旅行なのですが、ともかく、石家莊まで行つてみました。それからつい一兩日前北京へ着いたところです。北京の街は、なるほど、見たところでは、不幸な戰禍を免れてゐるやうに思はれます。しかし、民心はどうでありませうか。旅行者たる私には、一種解し難い時局の謎もあります。そこで私は、この機會に是非、御國の知識人から、出來るだけ率直な御意見を聞かしていたゞけたらどんなに參考になるだらうといふ考へを起しました。しかも、それが必ずしも不可能でない最大の理由は、今度の事變が幸ひに國民と國民との爭ひでないといふ

こと、お互にいくぶんは違つた意味をもつてはゐませうが、ともかくも、中國人と日本人とが、事こゝに至つても、なほかつ仇敵の間柄ではないといふことを、兩國の政府がはつきり聲明し、國民も亦それぞれ、その點を深く認識してゐることであります。この認識は、外交の掛引からは遠いものであると私は信じたい。少くとも、さういふ信念をもつて、兩國民の不幸を見つめ、その前途を憂へてゐる日本人、殊に、知識層の大部に、私は少數の方々でもいゝ、眞に同志と呼ばるべき御國の知識人の聲を聞かせてやりたいのであります。

今日こゝにお集り下さつた方々は、その經歷、地位、また、現在の出處進退に於て、われわれが躊躇なく、味方と呼び得る方々であらうと信じますが、私自身、日本人として當然の國民的義務を負うてゐますと同樣に、

皆さんも、中華民國人として、言論行動の上の制約を顧慮せられなければなりますまい。これは申すまでもないことで、私がたゞ、皆さんから伺ひたいと思ふのは、專ら、文化的な部門についてであります。例へば日中兩國民の提携による平和百年の事業が、果してどんな基礎の上に築かれなければならぬかといふやうな問題について、皆さんの抱負なり、豫想なりを聽かせていたゞけたら、大へんうれしいと思ひます」

通譯者の迷惑も顧みず、私はひと息に喋つてしまつた。

が、どうやら趣旨だけは通じたと見え、劉氏が徐ろに口を開いた。この人は、たしか、上海に於ける左翼運動のリイダアの一人であつたとか、その後轉向して反共運動に投じたのだといふ話を前もつて聞いてゐたから、私は、その雄辯のお里が知れる氣がして興味を覺えた。熱情を織りまぜて

理論を運ぶことになれたあの一種の型は、世界共通とでも云ひたいほどである。通譯がところどころにはひる。それでもう譯したのかといふ、納まらぬ顔附がありありと讀みとれる。が、彼は續ける。

日本語に移された部分について云へば、この座談會はまつたく散漫至極なものであつた。

二三の質問を發しはしたが、私の訊きたいことはまともに答へられず、僅かに日本語達者な柯、關兩氏がその親日的辭令をもつて、あたらずさはらずの意見を述べるだけである。

東京へ歸つて二た月目に、關瑾良氏から、この座談會の筆記を送つて來た。勿論、支那語で綴られてゐるので、それを早速、一戸務氏に譯して貰

ひ、念のために讀み返した。通譯入りの座談會といふものが、如何に心細いものであるかといふことをみせつけられるやうなもので、それだけに正確を保し難い記錄ではあるが、思ひきつて、次にその譯文をのせてみる。

日支文化作者座談會

昭和十二年十月二十七日午後六時
場所　北京ホテル

岸田　劉さんからひとつ……。

劉　今日この會合に參加し、かゝる問題に就て語ることができますのは、私の甚だ欣快とするところであります。で、私をして客觀的な見地から言はしていたゞきますならば、この度の事

變は最も悲慘な出來事であり、日支兩國の不幸ではありますが、かゝる時機に日支間の種々の問題を研究するといふことは、誠に所謂、今日の不幸は即ち明日の出路であります。この點よりしますれば、過去の問題に就ても詳細に檢討し、今後の問題に關しても、充分愼重に研究するといふことが、今日の座談會の核心になるのではないかと思ひます。

橋川　劉君の「今日の事變は明日の出路」とはなか〳〵味のある言葉ですね。

岸田　劉さんに伺ひますが、さういふ考へをもつてゐる人は、御國の知識階級に相當ゐますか。

劉　支那の現在の情勢からみれば、こんなことを云ふ者は少いでせう。この言葉を了解し、かかる信念をもち得る者もまた少いでせう。これらの同志を求め、この言葉を實際に達成しようと望むことは殊に容易ではないでせう。

岸田　お話はさうですが、日本の心ある人々は、この際中國といふものがほんたうに立直ることと、この事變の意義をお互に希望ある方向へ向け直すことを望んでゐます。つまりこれを以て、兩國の眞の提携の轉機にしなければならぬと考へてゐるのですが……。

劉　岸田さんのおつしやることには特に感謝致します。時局認識に就て、私自身は何等拘はりはありませんが、日支事變は既に領土の爲の爭ひでもなく、又防禦の爲の戰ひでもなく、その

流血の目的は東亞の未來を光明にするか暗黑にするかを決するにある事を知らねばなりません。

關　岸田さんから私に意見を求められましたが、何ぶんにもこの怱忙の際で、ちやんとした意見を吐くだけの用意がないことを恥しく思ひます。ただ、北支今次の戰禍を目擊して以來、自然、日滿支相互が提携共同して光明の路に進み、北支の眞に理想的な明朗化を期するといふことを深く望む氣持になつてゐます。然し、これは今後私共の努力によつて始めてこの理想の目的に到達するものであつて、どうしても長時間の檢討を經なければならぬと思ひます。私の意見を申しますならば、兩國の眞の親善を結ばうとするなら、先づ相互に彼我の國情と兩國民族の習俗とを明かにすることが最も必要だと思ひます。雙方の國情、民俗に互にみなそれ〴〵相當の認識をもつてこそ、眞に親しみのある好感情も生じて來るものです。好感が生れて始めて親善と云はれるもので、さうでなければ、いくら親善などといつても、これは口先だけの虛言にすぎません。私の希望としては、將來、毎年二回、日本視察團を作つて、北支一般の青年に日本の國情、習俗及び文化の進展に就いて、先づ相當の了解と認識を與へ、更に教育とか文藝とかの方面で、徹底的に指導し、一般青年から全體の民衆すべてに兩國相互の親善の意義を了

解させる。かくて始めて眞の親善の實が行はれると信じます。

既に砲火もやみ、到る處、戰前の北支に復興しようとしてゐます。正に、一般民衆が正しい指導原理と偉大な決心を抱き、北支は北支人の北支であるといふ精神を以て日本と提携すべき好機であります。回想しますれば、古く日露戰爭の際、東郷元帥が、「皇國の興廢この一戰にあり、各員一層奮勵努力せよ」と云はれたこの一言の下に、全軍心を一にして露國の海軍を掃滅しつくし、最後の勝利を得たのであります。現在私はこの偉言を借りて「東亞の平和は日滿支共同提携にあり、願くば、三國民衆一層奮勵團結せよ」と云ひたいと思ひます。現下の情勢よりしますれば、私は三國協和協同して光明の路、親善の途に向ひ努力邁進する好機であると信じます。

最後に一言しますならば、東亞の光明と暗黑とは、實に日滿支三國が眞の提携をなし得るか否かに繫つてゐると斷じたいのであります。

柯　所謂、兩國親善の實をあげるには、旅行團を組織して實地に日本に行けば或は相當の理解が得られるのではないかと思ひます。但し、その指導者は日本の情勢に就て最も詳細な知識をもつたものでなければなりません。單に日本に理解のあるもののみに日本の情勢を知らしめ、

理解のない者には知らしめないといふやうなことでは駄目です。例へば北京なども、事變前には話の最中に滿洲國といふ三字が出ると露骨に不愉快な顏を見せるやうなものがありました。中央政府は九一八以後（滿洲事變を支那では九一八事件といふ）、教育部でひそかに各學校等に日本の侵略の祕史を研究せしめたり、學校の教材に抗日の文章を加へたりして、映畫館、劇場等にもみな抗日宣傳が行はれ、遂に今日の事變をひき起すやうな情勢に至つたものであります。ですから、國民によく親善の意義を了解させるといふことも、餘り急いでやらうとしては、またむづかしいと思ひます。

鮑　切迫してゐた周圍の狀況がこの事變を惹き起すやうになつたのですが、この情勢は長時間に亙つて釀成されたものですから、今度もまた長時間かゝつて解決せねばなりません。元來、淺い原因によるものではないのですから、從つて、單なる見學ぐらゐで調整できることではありません。見學などといふ企ては決して根本的な了解を達成する方法ではないと思ひます。今次の事變は兩國のやむを得ざる情勢から生じたものであり、國家さへどうすることもできないのですから、我々國民がかれこれ云つてみたところで始まらないのであります。ですから、日支問題を解決しようとするなら、單に目前の事變ばかりでなく、眞に理想に合致させることを

考へて解決を圖らねばなりません。

胡　日支兩國の版圖は接近してゐますし、且つ何れも同じく黃色人種です。現在の如き事態が生ずる筈がないやうに思はれます。從て現在の情勢は、單に日支兩國政府間の問題ではなく、九一八以前、歐洲大戰以後、ソビエットが成立して東亞に赤化を試みてから、處々に抗日の情勢を引き起すに至つたのです。九一八以後は、白人と結んで抗日を行ひ、文化の上にも種々破壞行爲があり、日支の間は敵對を徹底的に解決し難いやうにさへ思はれました。で、問題の親善關係といふことですが、政治方面の解決は暫く措き、若し、兩國國民が共同して東洋文化の爲に努力するならば、先づ親善の保障が得られたと云つていゝと思ひます。

柯　私は日支事件に關して、現在の狀態と事實とに基いて申しますなら、その最大の原因は實に誤解にあると思ひます。蓋し、兩國間に緊密な理解がない爲に、九一八事變は勿論、今次事變でも、日本では中國に對して、領土的野心はないと云つてゐるにも拘はらず、支那人の氣持としてはそれが信じられないものゝやうです。日本人が如何に聲明しても支那はそれを承認し得ない處に、抗日の行はれる所以があります。此種の情勢に對して兩國國民が緊密な理解をもつならば、再びこんな事變が發生するやうなことはないでせう。ですから、極力、兩國國民相

互の緊密な理解を圖ることは實に當面の急務だと存じます。苟くも、この一事さへ達成できますならば、一切の問題は立所に解決するのであります。

劉　私は日支相互の理解といふ主張に就ては、深く同感いたします。日支の合作といふことが目前の環境のためにするのではなく、防共のために合作するのであるとしたならば、こゝで少し論じてみる必要があると思ひます。

才氣縱橫の關君が先ほど云はれた東鄕大將の言は、彼の時には、日本自身、興亡の秋でした。現在は當時と異なり、今や日本は重大な責任を負うてをります。ですから、日本の所謂、領土的野心はないといふことは、私は之を信じて疑はないのであります。といふのは、蓋し、日本の任務は寧ろ東亞民族を覺醒して、防共のため共同努力することにあるからであります。故に、今次の事變は不幸でない譯ではありませんが、將來の出路はこゝに始まるとも云ひ得るのであります。

岸田　只今皆さんがおつしやつたやうな御意見はそれ〴〵われ〳〵の首肯できるところですが、いつたい、さういふ思想は、事變前に既に存在したのでせうか。この事變がそれを生んだのでせうか。

劉　その點に關しては、私は兩種の解釋をもつてゐます。私個人として北支の情勢を觀察し、個人の立場で申しますならば、一般政客は事變後になつて此の問題を論じてをりますが、私は兩年前から相當の工作をなし、日支將來の親善に努力してゐました。

日支兩國國民が共同して防共の立場に立ちますなら、必ずや組織あり信念ある民衆が、日支の種々の立場上、防共工作に努力してこれを達成し得ると信じます。

鮑　劉君が云はれたのは、解決方法と思想の養成といふことでしたが、岸田さんが、此の種の見解は、事變前に起つたものか、又は事變後に起つたものかといふお訊ねでありましたから、私はこれに就て一言附け加へたいと思ひます。此種の思想の養成について、私達は合理的な解決工作を開始してから既に一年四ケ月になります。私等は亞洲文化促進會を組織して理解の一助となし、その會で新聞雜誌などを發行して種々宣傳工作をなして來ました。會員は三百餘名で、みな農工青年によつて組織されてをります。もつとも、舊政權下にあつては、此種工作は甚だ難事業ではありましたが、然し兎に角今日に始つたものではないのであります。

岸田　諸君の努力に敬意を表します。

なほ、今後、諸君の自發的な活動に期待できるとしたら、どういふ範圍でどんな事業が行はれるでせうか。

劉　日支間の誤解といふ最大の問題は、文藝作家の衝突をひき起します。知識階級は作家に導かれて、青年を抗日の立場に走らせます。教育界も亦、青年に抗日思想を培養します。故にもし、文化といふことから手をつけて行くとしたら、單に日本に一兩月間旅行して來ただけで、直ちに效果を收めるといふやうなわけには行かないのであります。日支兩國青年が、苟くも能くこの事情を洞察して文化工作に進み、先づ、北支教育及び、文化事業から着手し、一方また日本側の援助を得て、大學生は日本に留學し、專門家は日本の社會政治等を研究して相互に徹底的に了解し合ひ、然る後、兩國が合理的な防共といふものに對して十分の信念と思想とをもつに到れば、日支間の種々の問題が自ら解決され、大いに光輝を發揚するといふことも實現困難ではありません。

柯　私の意見を云へば、兩國相互の理解といふことは寧ろ二つの方面から進めるべきであると思ひます。政府は親日を以て方針となし、教育方面に於ても親日の步調を以て進み、例へば、學校などでも、外國語の課目などは日本語を第一外國語とすることにすれば、學生は將來日本文の書物を見て直ちに了解し得るやうになるでせう。民間に於ても、日本に到つて日本の政治

風俗等を研究し、或は新聞雜誌等に報告發表するのも效果があります。この他、日華協會の如きも專ら日本各地を旅行する紹介をなし、個人の旅行でも通譯をつけて招待することゝし、全然費用を要求せず、日華協會を財團法人として專らその事に當るやうにすれば、支那人が日本に參つても甚だ便利であります。また支那にも、これに似た方法を組織して、日本人にも亦支那を理解させる機會を作るべきです。こんな風にすれば、相互理解の工作を實行することも容易ではないかと思ひます。

岸田　此種の組織に關しては、日本でも、大いに研究する必要がありませう。

今日の座談會は正式に行はれたものでありませんが、諸君とお目にかゝる機會を得たことは、私としては非常にうれしく思ひます。どうぞ、今日のお話を將來の事實といたしたく、切に空論に終らせたくないと思ひます。（散會）

デリカシイについて

座談會を切り上げて、一同食卓につく。扉を距てたホールでは、ダンスがはじまつてゐる。

フランス人の給仕頭が平服のまゝで酒の注文をきゝに來る。

速記者の佟錚君は菜食主義者だといふことがわかり、私は給仕頭に、なんとかならぬかと相談する。卵はどうか。卵もいかぬ。ソースも肉汁がはひつてゐては困る。サラダならよささうだが、マイヨネーズは卵の黄味を

使ふから駄目だ。やつとバタだけはよろしいとあつて、ハウレンサウのバタいためを皿へ山盛り持つて來させる。給仕頭はヴェジエタリアンといふ言葉を知らなかつたのである。

日本人と支那人ではどういふところが違ふかといふ話になる。

第一に、ちよつと見たところでは、日本人だか支那人だかわからない顔があると、誰かが云ひ出す。さう云へば、さつき、關瑾良氏がはひつて來た時、私は、日本人だとばかり思つてゐた。名刺を出されても、まだ、關(せき)なにがしと讀んで、日本人側が一人ふえたものと早合點をし、そのつもりで話をしかけたくらゐである。柯氏も亦、よく日本人と間違へられるといふ。なるほど、さう云へば支那人には珍しいずんぐり型である。そして、この二人とも、不思議なことには、日本に長く住んで、日本を識ること最

も詳しいのである。

柯氏曰く、

「日本人と交際をして一番われわれが苦痛に感じるのは、例へば、日本人に物を貰ふ、或は御馳走になる、すると、その後會つた時、必ずお禮を云はなければならない。先日は誠に、といふ具合に、ちやんと挨拶をしないと、あいつは怪しからんと云はれる。忘恩の徒だといふことになる。少くとも禮儀を知らん奴と思はれる。これは、支那人の習慣と違ひます。こつちは、決してそれを忘れてゐるわけでもなければ、有難く思はないわけでもない。しかし、それを口に出して云ふのは可笑しいぐらゐに思つてゐる。何時かは返禮をするつもりだし、それも、直接にそのお返しをするのではなく、たゞ厚意に酬いるに厚意をもつてする機會を待つてゐるわけです。

ところが、日本人は、それでは承知しない。默つてゐると感謝のしかたが足りないと思ふ。顏を見たら、すぐ、その相手から何を貰つたか、いつ御馳走になつたかを憶ひ出さなければならぬといふことは、これは、われわれには辛い。支那人同士は、さういふことで、恩を着せたり着せられたりしないのです」

この話は實に面白いと思つた。

ところで、私は、その後日本へ歸つて、信濃憂人といふ人の譯した「支那人の見た日本人」といふ本を讀んだが、たまたま、黑海震なる一支那人の「日本留學日記抄」の中に、次のやうな記事がある。

「十二日。日本人は本當にケチ臭い人間だ。一圓何十錢か出して支那料理の一遍も奢つてやるとか、或は、飲食品の一番安いところでも贈つてやる

と、何度も何度も仰山にお禮を云ふことは請合で、たとへそれから何年かたつた後にでも、何時何處そこでは御馳走にあづかりましてなどと、まだお禮を云ひだすものである。

私が今度鈴木さんの家に越して來た最初の日に、一箱の白砂糖を買つて鈴木さんにあげようと思つてそれを持つてあの人の前まで行くと、鈴木さんは早速跪いて、何だかよくはわからないが、くどくどとお禮の文句を述べたてられたので、私はまつたく途方に暮れて泣きだしたくなつた。かういふことはわれわれの國では決してみられないことである」

これでみると、われわれは、やるとか貰ふとかいふことに、そんなにこだはつてゐるのかと、變な氣持になる。

日本語を話さない人はつい默り勝ちになり、さもなければお互に支那語

で喋り合ふといふ具合で、私はやうやく隣席の胡蒞棕氏から反共戰線社の事業について説明を聽いたくらゐである。同氏の云ふところに從へば、この運動は東洋思想を指導精神とし、儒教的な道德原理をかゝげて、唯物論の虛を衝かうとするものらしい。

一同を送り出してから、私は自分の部屋にはひり、今日の會合が、いろいろな食ひちがひで失敗に終つたことをひどく後悔した。

殊に、私として心甚だ愉まない理由はもう一つほかにある。どんな口實を設けたにせよ、この時局下に、公に支那人を招き、何かを喋らせようといふ淺薄な思ひつきは、われながら感心しかねるといふことを、とくに氣がついてゐてどうにもできなかつたのである。

さう云へば、周作人氏が故障のために引つ返した事も、寧ろお互のため

に幸ひであつた。

「私は今度の事變がなんのために起つたのか、どうしてもわかりません。もちろん、普段から政治といふものはちつとも興味はないのですが、日本と支那との間に、武力で解決をつけなければならないやうな難問題があつたでせうか」

と、彼は訪ねて行つた私に向ひ、落ちついた調子で云つた。私は、日本人の立場からそれに答へる必要を敢て認めなかつた。事變前の、所謂「排日的空氣」なるものを、彼は誰よりもよく知つてゐる筈である。それを知つてゐて、なほさういふことが云へるとしたら、彼にはまた彼の見方があるのであらう。

日本婦人を妻とし、大學で日本文學を講じ、革命作家魯迅を兄にもち、

南京政府から俸給を貰つてゐた氏の苦衷は察するに餘りがある。

「北京大學が今度長沙に移つて、もうそろそろ開講の時期なんですが……政府からも早く來いといふ通知が來てゐます。しかし私は、行かないつもりです……家族の關係がありますから……」

最後の一句を口の中で云つて、氏は靜かに眼を閉ぢた。

凝つたところのない、どつしりとした好もしい住居である。いくつかの壁で仕切られた中庭が僧院のやうに閑寂な匂ひを漂はせてゐる。植木らしい植木はない。たゞ、自然に伸びたやうな楊柳が一本、ひよろひよろと立つてゐる。敷石のモザイックが、細かな葉の影を映して、母屋の前の日溜りをくつきりと浮きあがらせる。何ひとつ、こゝをかうしたいといふやうな氣を起させぬものがある。おのづからな調和とはこれを言ふのであら

う。

氏は門口まで私たちを送り出し、O氏の問ひに答へて、嘗て魯迅が住んでゐた部屋といふのを指さし、N氏の希望で、私と並んでレンズに向つた。

氏にとつて、なんのための見も知らぬ日本人の訪問であらう？

時として冷酷たらんとする觀察者も、また、苦(にが)さを苦さとして永く記憶する瞬間があるのである。

75
29

北京を去る

豫定の日數は餘すところ幾日もない。

塘沽から出る船を待つてゐるより、大連へ廻つた方がいくらか早いやうなので、弟に會ふ便宜もあり、かたがたさうすることに決めて、寢臺車を豫約した。

「もう一度是非來ます。これでは北京を觀たとは云へますまい。なにか、非常に心を捉へるものがあるのはたしかです。好きになつたらたまらない

だらうと思ふ。早く云へば、生活のダイメンションといふやうなものが、人間の本性にぴつたり合つてゐるといふ感じがするのだが、僕には、それ以上の分析はできません」

私はO氏にそんなことを云つた。

事實、かういふ都會が世界に一つや二つ殘つてゐてもいゝと思ふ。機械文明が取りつゝあるコースとは別に、いくらか頽廢の色は帶びながらなほこのやうにある種の秩序と豐かさとを保ちつゞける文化の形態といふものは、さうざらにはないのである。

人類の進歩のために、かういふものは役に立たぬといふ考へ方もうなづけないことはないが、傳統の墨守から生じた潤ひのない形式主義とはおのづから別な、融通無碍な一面がたしかにあることを注意しなければならぬ。

私は、たゞ、建物や、街路やそれらが組み立てる都市の外觀についていふのではない。それらを含めてではあるが、北京といふ「生活體」の發散する雰圍氣についていふのである。

支那全體については、また違つた見方をしなければなるまい。私は、この複雜な國家を、民族を、まだ語る資格はなささうである。

が、今まで漠然と傳へ聞いてゐた支那、時としては比類なき愛情を以て、時としては、敵意と輕蔑とをもつて語られる支那を、極めて自分には緣の遠いものと考へてゐた。ところが、政治的な意味ばかりでなく、私は、今度の旅行を契機として、支那及び支那人に對する興味が、非常な勢ひで頭をもたげて來たことを告白する。

十月二十八日午後二時、O、N、Wの三氏に送られて、私は、北京を離れ

た。

二等のコンパルチマンには、私のほかに、支那人の一家が乘り込んでゐた。中年の夫婦と、やゝ年をとつた身内らしい女と、赤ん坊との四人である。細君は三十そこそこであらうか、わりに智的な顏をしてゐるが、だるさうに後ろへもたれたまゝ、赤ん坊の世話を主人ともう一人の女に委せたきりで、時々、ちらちらと私の方へ好奇的な眼を向けてゐた。

主人は子供のことばかりに氣をとられ、抱き上げたり、寢かせたり、菓子を與へたり、頭を撫でたりしてゐた。やがて、ズボンを脫がせ、床の上の痰壺へ小さな尻をあてがつて大便をさせはじめた。

云ふまでもなく、私の眼の前である。私は廊下へ出たくもあつたが、また、それも惜しい氣がして、ぢつと網棚の一隅を睨んでゐた。

用事がすむと、痰壺は廊下へ持ち出された。細君が何やら小聲でもう一人の女に囁いた。主人が歸つて來て、袋から梨を取り出し、女たちはそれを一つづつ分けた。

主人は、私の前へも二つ梨をおいて、食へとすゝめるのであるが、私は、遠慮した。

天津でこの一家族は私に丁寧な會釋をして降りた。

塘沽で日が暮れ、昌黎で夜が明けた。

葡萄と梨の産地と見え、プラットフォームはさながら果物市場である。大きな籠に積みあげた葡萄をめいめい手に提げて歸つて來る。

秦皇島は砂丘のなかに建てられた明るい街である。海上に浮んだ無數の船は、みな英國の旗をたてゝゐるわけではない。時代の轉換を暗示する風

景である。

いよいよ山海關だ。萬里の長城の一端があつけなくそこで切れてゐる。遠く山腹を這ひあがる姿は、奇觀でないこともないが、私の眼は、もうさういふものにいつか慣れてしまつた。

それよりも、一歩滿洲へ踏み込んだ瞬間、私を微笑させたのは、畑の眞ん中を、黑い一頭の豚がちよこちよこと走つてゐたことである。

北支の旅行を通じて、生きてゐる豚をはじめて此處でみたといふのは、ちよつと皮肉な氣がしたからである。

また夜が來た。

闇の中に、次第に浮ぶ灯の海は、金州であつた。ネオンサインもあちこちに見えて、私は思はず身ぶるひをした。

もう日本へ歸つたのも同樣である。私の役目はこれですんだのであらうか？

大連で弟とその一家のものたちに會ひ、大場鎭陷落の提灯行列に賑ふ夜の街を歩いて、私は、この旅行の無意義でなかつたことをしみじみ感じた。が、最後に門司までの船の中で、私は是非讀者諸君に告げておかねばならぬ情景を目擊した。

それは、食堂で夕食の最中である。

一團の日本人が酒杯をあげて大いに戰勝氣分を漂はせてゐたが、忽ち、そのうちの一人が、すぐ後ろの席にゐる白人の男女に、何やら怪しげな調子でからみつき、しまひに、その女の肩へ手をかけようとした。女は、憤然として起ち上つた。連れの男は、その女をかばふやうにして連れ去つた。

件の日本紳士は、重心を失つて尻もちをついた。

「Sale type!」

私の耳へ、鋭く、この一言が飛び込んで來た。今の女が、吐きだすやうに云つたのである。

海は靜かであつた。

馬關海峽はしかし秋雨に煙つて、晴天十日の大陸は、もはや私の記憶のなかに遠ざかつて行つた。

75
28

北支物情

定價一圓五十錢
滿・鮮・北臺・樺―外地定價一圓六十五錢

昭和十三年四月二十七日印刷　昭和十三年五月一日發行

著者　岸田國士
印刷者　綾部喜久二　製本者　中野和一
印刷所　宮本印刷所　東京市神田區小川町一ノ一一
發行者　福岡　清　東京市神田區小川町三ノ八
發行所　株式會社白水社　東京市神田區小川町三ノ八
電話神田(25)三五九八番・振替東京三三二二八番

岸田國士譯

ルナアル日記

全七卷

各 價一圓八十錢 送料十四錢

第一冊（一八九七—九年）既刊
第二冊（一九〇〇—一年）同
第三冊（一九〇二—三年）同
第四冊（一九〇四—六年）同
第五冊（一九〇七—一〇年）同
第六冊（一八八七—九年）同
第七冊（一八九四—六年）近刊

岸田國士譯

にんじん

決定版

「にんじん」これこそは、翻譯文學の古典として永くわが國民に、愛讀される絶妙の名作である。小供にも、大人にも、何時の時代にも、都會と田舍とを問はず、不滅の創造の人生畫として鑑賞の折をより多く作つておくべき一卷である。この決定版はさういふ意味から讀み易く、愛藏にも適し、保存にもかなひ、而も親しみのある裝幀と型態にして上木した。この特價期間に是非一冊備へられよ。

四六判・三一八頁・本文五號組・挿繪四十・寫眞一
背洋布橙黃色木炭紙裝・文字金箔押・箱入
第一刷一萬部限　特價一圓六十錢　送料十四錢　定價一圓八十錢

岸田國士著　**落葉日記**　中川紀元畫裝（挿繪十一）菊判・三三八頁・鳥の子紙裝　定價二圓・送料十四錢

岸田國士著　**現代演劇論**　新菊判・四七三頁・蕨織裝本文フールス紙印刷・箱入　定價二圓半・送十四錢

岸田國士撰　**新撰劇作叢書**　（各價八十錢・送九錢）

二十六番館・二人の家（川口一郎作）　おふくろ・他三篇（田中千禾夫作）　瀬戸内海の子供ら（小山祐士作）　赤鬼・他三篇（阪中正夫作）　澤氏の二人娘・歳月（岸田國士作）

ルナアルの名著

葡萄畑の葡萄作り（感想隨筆小品）　岸田國士譯　價一圓・送十錢
明るい眼（感想隨筆小品）　高木佑一郎譯　價一圓・送十錢
ねなしかづら（長篇小說）　高木佑一郎譯　價一圓二十錢・送十錢
ヴイルドラック作　ルナアル作
商船テナシチー・赤毛（戲曲にんじん）山田珠樹譯　價一圓・送十錢
南の風（ルナアル作「ヴェルネ君」の飜案）辰野隆著　價二圓三十錢・送十錢
リラダン作　未來のイヴ　渡邊一夫譯　特製價五圓　並製價三圓八十錢　送各三三錢
モンテーニュ隨想錄（全三卷）　關根秀雄譯　特製一册五圓半　上製一册四圓　送各三三錢
選抄モンテーニュ隨想錄　關根秀雄譯　價二圓五十錢・送料十四錢

757
29

ジイド作 山内義雄譯
窄き門
定價一圓・送料十錢

ジイド作 山内義雄譯
贋金つくり
價一圓半・送十四錢

ジイド作 鈴木健郎譯
贋金つくりの日記
定價一圓・送料十錢

ジイド作 今日出海譯
地の糧
定價一圓・送料十錢

フイリツプ作 山内義雄譯
母と子・母への手紙
定價一圓・送料十錢

ルイ・エモン作 山内義雄譯
白き處女地
定價一圓・送料十錢

ブールジエ作 山内義雄譯
弟子
價一圓四十錢・送料十錢

パニヨル作 永戸俊雄譯
フアニー
定價一圓・送料十錢

コクトオ作 東郷青兒譯
怖るべき子供たち
定價一圓・送料十錢

デユアメル作 木村太郎譯
犠牲
定價一圓・送料十錢

ドオデー作 櫻田佐譯
アルルの女
定價一圓・送料十錢

モーパツサン作 杉捷夫譯
死の如く強し
定價一圓・送料十錢

モーパツサン作 杉捷夫譯
ピエルとジヤン
定價一圓・送料十錢

モーパツサン作 中村光夫譯
ベラミ
定價一圓二〇錢・送料十二錢

ジイド作 今日出海譯
二つの交響樂（田園交響樂 イザベル）
定價一圓・送料十錢

アナトオル・フランス 朝倉季雄・稲守操一譯
文學生活
價一圓二十錢・送十錢

ヴオルテール作 池田薫譯
カンディード
定價一圓・送料十錢

落合孝幸譯
ロティの日記
價一圓二十錢・送十錢

カミ傑作集 吉村正一郎譯
人生サーカス
價一圓・送料十錢

アナトオル・フランス 水野成夫譯
ペンギンの島
價一圓半・送料十錢

ラヴダン作 高瀬毅譯
報國の秋
價一圓・送料十錢

モーパツサン作 岡田貢吉譯
女の一生
價一圓二十錢・送料十錢

由木康譯
パスカル小品集
價一圓二十錢・送料十錢

5,2

75
28

75
29

757
29

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black